非核平和都市品川宣言

2018　品川区平和使節

派遣レポート

Shinagawa City
品川区

非核平和都市品川宣言

今、この地球に、
人類は自らを滅ぼして余りある核兵器を蓄えた。
いまだかつて、開発された兵器で使われなかったものはない。
これは、歴史の恐るべき証明である。

一刻も早く、核兵器をなくさなければならない。
頭上に核の閃光がひらめく前に。
遅すぎたとき、それを悔やむだけの未来すら、
我われには残されていない。

品川区は、核兵器廃絶と恒久平和確立の悲願を込めて、
ここに非核平和都市を宣言し、全世界に訴える。
我われは、いかなる国であれ、いかなる理由であれ、
核兵器の製造、配備、持込みを認めない。
持てる国は、即時に核兵器を捨てよと。

このかけがえのない美しい地球と、
そこに住む生きとし生けるものを、守り伝えるために。

昭和 60 年 3 月 26 日
品川区

「シンボルマーク」

はじめに

品川区では、核兵器の廃絶と恒久平和の確立を願い、昭和 60 年 3 月 26 日に、区民の総意のもとに「非核平和都市品川宣言」を行いました。

この宣言の趣旨を一人でも多くの方々に理解していただき、戦争の悲惨さや平和の大切さについて一緒に考えていくため、品川区では様々な事業に取り組んでまいりました。

本紙における、広島・長崎への平和使節派遣事業は、宣言の趣旨を次世代に語り継いでいくことを目的として、昭和 62 年から実施していた「青少年広島の旅」を引き継ぎ、平成 15 年度から始めたものです。「品川区平和使節」と位置づけ、本年度で 16 回目を迎えました。

今回、広島へは品川区立中学校 8 年生 15 名、長崎へは一般公募の青少年 5 名を派遣いたしました。平和を願う呼びかけに、区民の方などからたくさんの千羽鶴が寄せられました。平和使節派遣生はそれぞれの鶴にこめられた「平和」への願いを胸に、区民の代表として広島・長崎へ献架いたしました。

特に広島の派遣生はそれぞれの学校の文化祭や学習発表会において、派遣生一人ひとりが知恵を振り絞り、友達や地域の方々に一生懸命平和への想いを伝えました。

この「派遣レポート」には、平和式典への参加、資料館の見学、被爆者講話の聴講、碑めぐりなどを通して、派遣生が感じ、学んだ貴重な経験が報告されています。今回の経験を通して、平和の尊さ、大切さに対する認識を深め、その「想い」が学校や職場、地域社会に広がり、あらためて平和について考えるきっかけになれば幸いです。

末筆ではありますが、本事業の実施にあたりご協力いただきました講師の大隅勝登様、西岡　由紀夫様、広島市、長崎市、千羽鶴を託していただきました方々他、関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

品川区

目　次

はじめに…… 1

第１部　中学生広島平和使節派遣
　１．行動日程表…… 3
　２．行動のスナップ…… 5
　３．感想文…… 8
　４．被爆者講話……24
　５．碑めぐり講話……36
　６．成果報告……38

第２部　青少年長崎平和使節派遣
　１．行動日程表……47
　２．長崎での主な活動
　　（１）青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）……50
　　（２）被爆建造物等のフィールドワーク ……51
　　（３）平和祈念式典 ……52
　　（４）平和学習（意見交換）……53
　　（５）長崎原爆資料館見学 ……54
　　（６）自主研修・市内見学 ……55
　３．成果報告書……57
　４．派遣をふり返って（感想）……63

第３部　資料編
　１．広島
　　（１）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第 ……65
　　（２）平和宣言 ……67
　　（３）平和への誓い ……69
　２．長崎
　　（１）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第 ……70
　　（２）長崎平和宣言 ……71
　　（３）平和への誓い ……73

第１部
中学生広島平和使節派遣

出発前品川駅にて（８月５日）

●派遣生

【前列左より】

浜川中学校　：二上　翔
大崎中学校　：桜井　瑠海
荏原第一中学校：金子　耀平
荏原第六中学校：住田　彩葉
鈴ヶ森中学校　：野村　春花
荏原第五中学校：牧田　沢英
伊藤学園　：鈴江　翠花

【後列左より】

荏原平塚学園　：麻生　和勇斗
東海中学校　：小倉　丈
品川学園　：折原　羽海
豊葉の杜学園　：山下　悠眞
冨士見台中学校：田中　凜
戸越台中学校　：清水　結莉
八潮学園　：石　弥織
日野学園　：鈴木　茜

●引率者

荏原第一中学校副校長：鈴木　祐吾
浜川中学校主任教諭　：福永　健一
大井第一小学校副校長：倉次　里絵
総務部総務課　：尾上　大地

1．行動日程表

第16 回中学生広島平和使節派遣　平成 30 年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日（日）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
8：30	集合・出発式	JR 品川駅新幹線北口
9：17	品川駅発（新幹線）・昼食	
13：08	広島駅着	
14：15 ～ 15：50	被爆体験者講話	広島ＹＭＣＡ国際文化センター
16：00 ～ 18：00	原爆ドーム・平和記念公園 見学等	平和記念公園
18：30 ～ 19：30	夕食・打ち合わせ	レストラン「リバーズガーデン」
20：00	ホテル着・一日のまとめ	広島ワシントンホテル
22：00	就寝	

8月6日（月）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：30	集合・朝食	広島ワシントンホテル
8：00 ～ 9：00	平和記念式典参列	平和記念公園
9：30 ～ 12：00	意見交換会	広島ＹＭＣＡ国際文化センター
12：10 ～ 13：10	昼食	「お好み村」
13：20 ～ 14：10	袋町小学校平和資料館見学	袋町小学校
14：30 ～ 16：20	広島平和記念資料館見学	平和記念公園内
16：20 ～ 18：00	原爆死没者追悼平和祈念館見学	平和記念公園内
18：00	灯ろう流し	元安川
18：30 ～ 19：45	夕食	レストラン「リバーズガーデン」
19：55 ～ 20：15	灯ろう流し 見学	元安川
20：30	ホテル着・一日のまとめ	広島ワシントンホテル
22：00	就寝	

8月7日（火）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：00	集合・朝食	広島ワシントンホテル
8：30	ホテルチェックアウト	
9：00 ～ 10：30	碑めぐり講話	平和記念公園
11：45	広島駅到着	
13：17	広島駅発（新幹線）・昼食	
17：06	品川駅着・解散式	
17：25	解散	JR 品川駅新幹線北口

◎事前学習会・事後報告会について

第１回事前学習会　６月15日（金）

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識をもって、派遣に臨めるよう事前学習会を開催しました。

（1）派遣生自己紹介
（2）非核平和都市品川宣言事業について
（3）広島平和使節派遣事業について
（4）広島・原爆について学習
（5）事前学習課題について
（6）派遣日程や生活面・健康管理について

第２回事前学習会　７月20日（金）

各グループが第１回目の事前学習会で決めたテーマ「核の現状」「東京で原爆がおとされたら…」「原爆投下前と後の変化」の内容をグループ内で発表、意見交換を行いました。その内容を各グループでまとめ、全体へ発表しました。最後にスケジュールと注意事項を確認しました。

（1）グループ学習
（2）「派遣のしおり」内容確認
（3）派遣の諸注意事項について

事後報告会　８月22日（水）

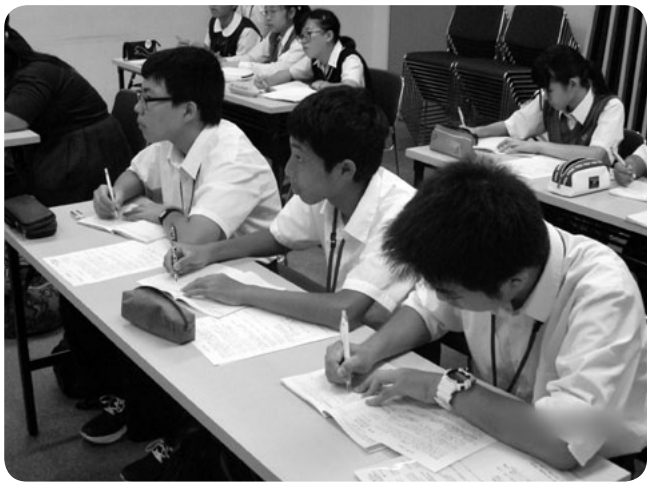
一人一人が広島で学んだこと、感じたことなど感想を発表しました。その後、今回の経験を同年代に伝えていくため、各中学校における派遣成果発表について確認しました。

（1）派遣の感想発表
（2）広島派遣の写真配布
（3）各学校における成果発表について

2．行動のスナップ

品川駅で出発式　8月5日

被爆者講話①　８月５日



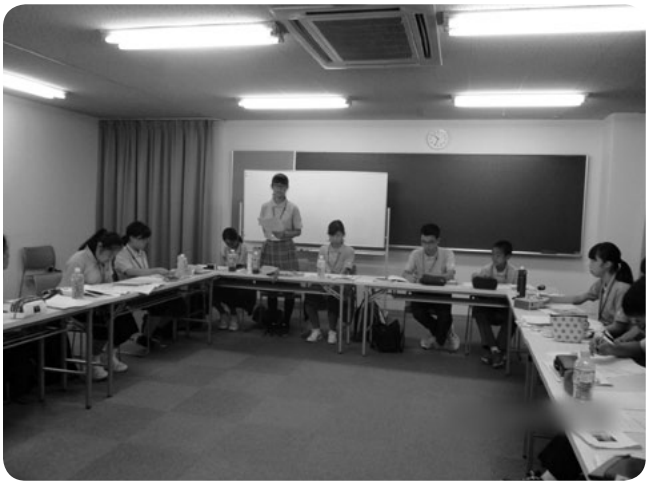
被爆者講話②　８月５日

平和記念公園を見学①　８月５日

平和記念公園を見学②　８月５日

区の代表として千羽鶴を捧げる　8月5日

平和記念式典参列　８月６日



意見交換等（講話や式典参加を通じて
感じたことをまとめる）８月６日

灯ろう作り①　８月６日

灯ろう作り②　８月６日

広島名物お好みやき（お好み村で昼食）８月６日

袋町小学校資料館にて　８月６日

平和記念資料館にて①　８月６日

平和記念資料館にて②　８月６日

灯ろうを放流　８月６日

碑めぐり講話①　８月７日

碑めぐり講話②　８月７日

帰りの広島駅にて　８月７日

3. 感　想　文

多くの人に戦争の悲惨さを知ってもらうために

東海中学校　小倉　丈

73年前の8月6日、午前8時15分広島市上空に1つの原子爆弾が投下されました。僕がこの広島平和使節派遣団に参加した理由は、以前鹿児島県にある知覧特攻平和会館の資料館や記念館に行ったことがあり、僕と同じ年代の人達が戦争で死んでいったことに衝撃を受けたからです。

何も見えなくなるような一瞬の閃光、そして摂氏100万度を超える熱線と放射線、爆風で街が吹き飛び、平和な生活はなくなり多くの命が奪われました。その中には「水、水をください」と言いながら水を求め、川や防火水槽に頭を突っ込むようにして亡くなった大勢の方々……。僕はこのような戦争の悲惨さをもっと伝え、少しでも世界平和へ貢献できればと思い、参加を決意しました。

派遣1日目に被爆者講話を聴き、2日目は平和記念式典に参列し、平和記念資料館や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学をしました。3日目には、平和記念公園を訪れました。どれも貴重な経験となりましたが、その中でも僕が一番印象に残っているのは被爆者講話です。

講話をしてくださった大隅勝登さんは、当時の生々しい情景が鮮明に浮かぶようなお話をしてくださいました。当時小学2年生だった大隅さんは爆心地から約2.5㎞のところにある工兵橋周辺で被爆しました。家へ帰ると、近所の家は崩れていたものの、幸いにも大隅さんの家は崩れていなかったそうです。大隅さんは帰ってすぐに身体を洗い流し、庭で育てていたトマトを麻の袋いっぱいに詰め、山の方へと母と弟2人と一緒に避難しました。夜が明け、昼頃家へ戻ってみると、家の中は割れた窓ガラスが散らばり、天井は剥がれ、足の踏み場もない悲惨な状況でしたが、町内会の方々が一緒に片付けてくれて、しばらく近所の3つの家族で過ごすことになったということでした。

何十年も経っているのに、まるで昨日のようにはっきりとお話ししている大隅さんを見て、小学2年生という幼い子供の記憶にも深く刻まれるような出来事だったということを実感できました。近くを流れる川の土手には多くの遺体が並べられ、水面を埋め尽くすほどの遺体が浮き、その身体が潮の満ち引きであたかも生きているかのように行ったり来たりを繰り返していたそうです。

また、遺体処理のため近くの公園で火葬された遺体は800体を超え、そこから発生した臭いはとても言葉にはできないものだったとのことでした。その状況が何日も何日も続いたと聞いたとき、僕は自分の頭で想像することができなくなってしまいました。平和な日々が当たり前になっている今の人々は、同じような状況に陥るのではないでしょうか。もし僕がその場にいたら、悲しみと恐怖のあまり足がすくんでしまいそうです。

今の日本は平和である、そう考える人がほとんどだと思います。しかし、世界に目を向けてみるとどうでしょうか。世界にはまだまだ紛争が続いている国があり、テロやデモが頻繁に起こっている地域も少なくありません。僕は、本当に平和だと言えるには、世界中どこに行っても争いがない世の中であることが必要不可欠だと考えます。そんな世界をつくるには、世界中の人々にも同じような考えを持ってもらわなければいけません。そのためには、まずは日本中の人々に平和について考えてもらわないといけないと感じました。

今現在、戦争を経験した方の平均年齢は80歳を超えています。戦争の悲惨さを忘れないためには、僕たちのような若い世代が戦争の悲惨さを知り、次の世代に伝えていかなければいけないと思いました。今回、貴重な機会をいただき、このような経験をできた僕は、このままで終わってしまうのではなく、現地で感じたこと、考えたことをこの先少しでも多くの人に伝えていきます。

広島平和使節派遣に参加して

大崎中学校　桜井　瑠海

今から73年前の8月6日、午前8時15分、広島に世界で初めて原爆が落とされました。

今回僕は、平和使節派遣生として広島を訪れました。現在の広島の町はとてもきれいで、73年前この場所に何にも無い焼け野原が広がっていたとは、信じられませんでした。

1日目は、被爆者である大隅勝登さんにお話を伺いました。大隅さんは7歳のとき、登校中に原爆の被害にあわれました。ピカッ、ドカーン、その後空からは沢山のガラスの破片が降ってきて、あちこちで民家が燃えている中を走って帰宅したそうです。土手にも川にも沢山の死体があり、その死体を焼却しているときの臭いは一生忘れられないとおっしゃっていました。白血病で亡くなられた方、失明された方、がんで苦しまれた方達の話には、とても胸が痛み、悲しくなりました。大隅さんご自身も被爆されたことで、健康を害され、80歳の今でも通院されているそうです。

2日目は、平和記念式典に参列しました。式典には、ご遺族の方をはじめ、総理大臣や各国の代表の方々も沢山出席していました。

私は黙祷で、「もう戦争は起こしません。安らかにお眠りください。」と祈りました。広島市長は平和宣言の中で、「人類が歴史を忘れあるいは直視する事を止めた時、再び重大な過ちを犯してしまう」と話していました。私達がここ広島に来た意味は、本当の戦争の恐さ、辛さ、痛さ、命の大切さ、平和の大切さを、未来に伝えていく為なのだと強く思いました。

式典の後、平和記念資料館を見学しました。強烈な熱線によって、皮膚がはがれ、ボロボロになった人や、焼けて瓦礫しか残っていない町の写真などを見ました。後障害で白血病やがんで亡くなられた方も多数いらして現在も原爆は被爆者の方の健康を脅かし続けているそうです。広島で

目にしたことは、一生忘れることが出来ないようなものばかりでした。原爆の恐ろしさを強く感じました。

３日目は、西岡由起夫さんから碑めぐりの講話をしていただきました。西岡さんに実際に、広島の町を歩いて案内していただき、碑をめぐりながら聞いたお話は、どれも胸がはりさけそうになるくらい辛くて悲しいものでした。テレビや本で見たり、読んだりしたものとは違い、直接心に響いてきました。その中でも建物疎開作業中に犠牲になった沢山の子供たちの名前が刻まれた碑がとても心に残っています。僕と同じ年齢の子供達です。今の世の中では考えられない悲惨なことでした。私は、今回広島派遣に参加して、命の大切さや平和の大切さを学びました。そして、普段何気なく生活している毎日がどれだけ幸せで、どれだけ有難いことなのかを改めて実感しました。この幸せを守るためには、１人１人が平和について考えていかなければいけません。

被爆者の方が高齢化している今、僕たちが見て、聞いて、感じたことを１人でも多くの人に伝えていきたいと思います。

「平和に向けて」

浜川中学校　二上　翔

「日本政府には、核兵器禁止条約の発効に向けた流れの中で、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現するためにも、国際社会が核兵器のない世界の実現に向けた対話と協調を進めるよう、その役割を果たしていただきたい。」と安倍内閣総理大臣の前で広島市長が訴えたことを今も鮮明に覚えています。

私が、今回の広島平和使節派遣で学んだのは、平和は願うだけではなく、見たり聞いたり知ったりするなど実際に行動をおこすことが何より大切であるということです。この考えの土台となったのが今回の平和使節派遣での３つの体験です。１つ目は、広島平和記念式典です。まず、参列している方々の人数に驚きました。そして、他国の方々も参列されていました。ここから、多くの人々が平和を願っており、その気持ちは、世界で共通だと感じました。式典の中のさまざまな話の中で最も印象に残ったのが、冒頭でも挙げた広島市長の言葉です。「役割を果たしていただきたい」という言葉から、広島の人々が平和を願う信念を感じました。２つ目は、被爆者講話です。大隅勝登さんから伺ったお話は、私の想像を遙かに超えるものでした。私は、川に死体が浮かんでいたり、辺り一面が燃えていたりしたことや瀕死の状態の人を助ける余裕がなかったことを知りました。このことから、当時は生きることが精一杯だったと感じました。３つ目は、広島平和記念資料館の見学です。館内で見たさまざまなものから、私は自分が戦争や核兵器についてほとんど理解していなかったことを知りました。なぜなら、被害の規模や状態、核兵器の仕組み、後遺症など自分の知らない多くのことを詳しく学んだからです。私は、戦争や核兵器での被害を「大変だった」という言葉で済ませてはいけないと思いました。もっと多くの人が被害の実態を

詳しく知ることが大切だと思うので、自分も広島で戦争の実態を学んだ者としてこの事実を語っていきます。

最後に、私はこの広島平和使節派遣で以前から抱いていた核兵器の廃絶を実現させるという思いがより一層強くなりました。また、「戦争は失うものばかりであり、実際に太平洋戦争では日本以外にも多くの国の人が亡くなっている。こんな無意味な争いは一刻も早くやめるべきである。そして、今こそ国と国とが手を取り合って、世界の恒久平和と核兵器の廃絶に向けて取り組んでいくべきである。」という戦争に対する自分の意見をしっかりと持てるようになりました。現在、シリアやイラン、イラクなど世界の至る所で戦争や紛争が何度も起こっており、犠牲者の人数は増え続けています。関係の無い人々の命やこれから輝いていくはずの子どもたちの命を奪う戦争を私は許せません。私は、派遣での経験や学んだこと、そして自分がそこから考えたことを多くの人に伝え、少しずつでも１人１人の戦争や核兵器に対する考え方を変えていきます。

「あの出来事を忘れないために」

鈴ケ森中学校　野村　春花

昭和 20 年、8 月 6 日、この日広島に「原子爆弾」が落とされました。あれから 73 年経った今、私は広島を訪れました。私は今回行って 2 つのことが特に印象に残りました。

一つ目は、広島平和記念資料館で見た展示物です。「血のついた服」「焼けている三輪車」「少し変形してしまった弁当箱」など当時の悲惨さを物語るようなものが展示されていました。そして、本当にこの広島に原子爆弾が落とされてしまったのだと改めて実感しました。たくさん展示されていた中でも特に心に残っているのは白血病で死んでしまった佐々木禎子さんが折ったとても小さい折り鶴です。今でも 63 年前に折られたものとは思えないくらい、とても綺麗に保存されていました。佐々木さんは医者から余命宣告をされていて、正直いつ亡くなってもおかしくない状況であったにも関わらず、「生きたい」という気持ちが彼女の折り鶴からヒシヒシと伝わってきました。彼女のその願いが込められた折り鶴には、未来への希望を感じることができました。

二つ目は、平和記念式典での「平和への誓い」です。その中の「人間は美しいものを作ることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものを作ってしまうのも人間です。」私はこの言葉を聞いて、改めて大切なことに気付かされました。「原爆投下」は我々と同じ「人間」がやったことです。今、この時代には、原子爆弾より威力の強い水素爆弾などがあります。水素爆弾などの核を保有している国はたくさんあります。この世界から核をなくすには、私たちだけでなく、たくさんの人たちが伝えていき、核廃止に向けて一人一人が考えて行動しなくてはならないと思います。

今回の広島平和の派遣に参加して、私はとても多くのことを学びました。それは広

島に実際に来て、多くのものを見て、多くの方とふれ合うことで、73 年前のこの出来事がどれほど私たち人間の歴史の中に深刻なことであったかを知ることができました。21 世紀になり、広島原爆投下が日に日に歴史の記憶から薄れ始めている現代にあって、けっして、あの出来事を忘れないために、今を生きる私たちが未来に向けてやらなければならないことがわかったような気がします。

「戦争の恐ろしさを学んで」

冨士見台中学校　田中　凜

先日のニュース、新聞で報道されたアメリカと北朝鮮の会談で核兵器について取り上げられていました。核兵器については小学校やテレビなどで学んだ事があり、どのようなものかはすでに知っていましたが、今回の広島派遣に参加して改めて恐ろしさについて知る事ができ、とても考えさせられました。

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島に原爆が投下されました。一つの核兵器により広島に住んでいた、40% の尊い命が奪われました。何の罪もない命が原子爆弾一発で失われ、住む場所や感情までも一瞬で消滅させてしまったのです。あれから、73 年が経った今、私は広島で原爆が投下され、たくさんの命が奪われたことで強い悲しみと同時に、この悲劇を二度と繰り返してはいけないと思いました。

私はこれまで広島・長崎への原爆投下についてテレビや新聞などで見ていただけでした。しかし、実際に広島に行き、お話を聞いて・見て・感じてどれだけ大きな過去の過ちかを理解し、当時の悲惨さを伝えていかなければならないと思いました。

実際に広島に行った初日、被爆者の大隅さんからお話を聞きました。その中でも印象に残っている事が二つあります。一つ目は、原爆投下後、被爆された地域の近くにあった川にたくさんの人が飛び込んだと言います。その後、川の水が見えなくなるぐらいの人の死体が浮いていて川の流れによって人の死体も行き来していたという事を聞きました。その死体を引き上げる度胸のある人もいなく、とにかく自分の事で精一杯であったそうです。

二つ目は、「原爆を落としたアメリカを憎んでいるか」という質問に対して、そんなことを言ったことでこの先何も変わらない。と話していたことです。自分の家族や友人をアメリカの原子爆弾で失い、とても恨んでいるだろうと思っていたためとても驚きました。その話を聞いて被害を受けた過去の事を訴えるのではなく、今後同じようなことが二度とおこらないように、核兵器を保持する意味を問いかけていく事が大切だと気がつきました。

この広島派遣を通して、この世界が「平和」であることは決して当たり前の事だと思ってはいけないと思いました。私達は産まれてから毎日食事をして、家族と会話し、楽しく一日一日を過ごすことが普通でした。戦争中は苦しい事ばかりで今のような暮らしは送れません。また、今ある平和がこれから先もずっと続くような保障もありません。そのため、核兵器の恐ろしさを

知り、今後の日本の未来を担っていく私達がより多くの人に発信して、同じことの繰り返される世界にならないよう、まずは自分から行動していきます。

「平和を作るために」

荏原第一中学校　金子　耀平

今回の広島平和派遣で学んだこと、それは世界の人たち全員が「平和」を望んでいるということです。

その理由は、5つあります。

まず被爆者講話で大隅さんは、紙一枚では埋めきれない程細かく当時の状況を伝えてくれて、僕は平和を強く望んでいることを感じました。戦争のときは自分が育てていたトマトを母にとってこいと言われて山に逃げて、夜はやぶ蚊と戦ったときの思い出、そして、原爆が落とされた2日後、一生忘れられないという死体を焼く臭いが町を襲った時のこと。原爆は誰もが苦しむ最悪のことだと改めて考えさせられました。被爆者の方々の平均年齢が82歳を越える今、体験談をみんなに伝えることは、改めて大切なことだと思います。

次に広島平和記念式典に参列して、広島市長が安倍首相の前で核廃絶を訴えたとき、参列者の多くの人に「そうだ、そうだ」という雰囲気があったことを今でも覚えています。

広島市長は「黒い雨降雨地域」を拡大することを強く求めていて、僕はその意味を放射能が降った地域を拡大することで、より多くの被爆者を助けてほしいということだと解釈し、そうするべきだと思いました。子供代表の小学生が、「人間は美しいものを作ることができる、人々を助け笑顔にすることができる、しかし恐ろしいものを作ってしまうのもまた人間である」と言ったことに僕は強く共感しました。そして世界の86カ国が参列した記念式典で配られたパンフレットが、英語で書かれていることで広島のことを外国にしっかり伝えることができると思いました。

灯篭流しで書かれていた文字は「平和」という言葉が一番多かったです。僕はそれを、水を求めてなくなってしまった人たちに二度とこんなことが起こらないようにするというメッセージだと感じました。

碑めぐり講話では、70年間植物が育たないといわれていた広島が復興する際、植物が育っていたことでとても元気づけられたと聞きました。碑には戦争を非難し、平和を願う詩がとても多いと感じました。被爆したレンガの前では核兵器廃絶を誓っていました。禎子の碑の下には全国各地から来た千羽鶴があって驚きました。

原爆ドームは現存している被爆した建物で、広島に原爆が落とされたという象徴でもあり、その中には支えの柱が組まれ、未来に残してみんなに見せたいという思いが強く、被爆当時の鉄柱が折れ曲がった状態で残っていて、写真だけでは分からない原爆の怖さが直に感じられました。

最後に僕が「原爆によって壊されたものはどこへ行ったのか」という質問に大隅さんは「分からない」と答えました。僕は、今、被爆者の平均年齢が82歳を超える中、その壊れたものを見せることでより原爆の

怖さが伝えられると考えました。

今回、広島平和派遣に参加し、平和、平和と唱えるだけでは何も始まらず、過去の過ちを見直し、未来へ生かさなければならないと思いました。

一人一人の気持ちで

荏原第五中学校　牧田　沢英

1945年8月6日午前8時15分、人類史上初の原子爆弾が広島に投下されました。爆心地周辺の地表の温度は3,000～4,000℃に達し、広島は一瞬にして焼け野原と化しました。そして、罪のない約14万人の尊い命、たくさんの人の幸せ、当たり前の日常が奪われました。

地獄のような光景が広がったあの日から73年、私は品川区平和使節団の一員として広島を訪れました。広島は、本当に原子爆弾が落とされた場所なのかと疑うほど綺麗な場所でした。路面電車が走り、多くの建物があり、街はとても賑やかで、平和記念公園の周辺は豊かな自然であふれていました。戦争の悲惨さは見えず想像との違いに驚きましたが、中には戦争の恐ろしさがひしひしと感じられる場所がありました。それは、原爆ドームです。そこだけ時間が止まっていて、原爆が落とされた事実や戦争の恐ろしさを私たちが忘れないように思い出させてくれているために存在しているような気がしました。

被爆者の大隅さんに当時のことを伺いました。それは私が思っていたよりも遙かに恐ろしいものでした。京橋川の神田橋の土手には遺体が並べてあり、満潮時には遺体が川を行ったり来たりしていた話を聞き、心が痛みました。

しかし、このような話からは背を向けてはいけないと思います。今私たちが送っている生活は、当たり前のことではないと気づかされました。学校に行き、勉強をし、友達と笑い合い、家族と食事をする当たり前の日々。当時は当たり前ではなかったのです。友達と別れるとき、「また明日」と言えるのも、明日のことを考えられるのも、明日が来ると分かっているからです。それがどんなに幸せで平和なことなのかを忘れてはいけません。

広島平和記念式典には、多くの日本人、外国人の方が参列していました。外国の方も平和について考えていると知ることができて嬉しかったです。広島に起こった出来事に世界の人が関心を持っていることが感じられました。私が広島平和記念式典に参加して周りの人に伝えたくなった言葉があります。

「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。」

この言葉を聞いて、笑顔にするものをつくるか、恐ろしいものをつくるかは自分の意識次第なのではないかと思いました。恐ろしいものをつくらないという強い気持ちを持っていれば、恐ろしいものがつくられることはないはずです。黙祷を捧げたとき、平和を願う人の心が一つになったような気がしました。世界中の一人一人が平和

を願う思いを持っていれば、戦争が起きることはないと思います。

世界中の一人一人が平和について考えるのは難しいことかもしれません。

しかし、「戦争は二度と起こしてはいけない」という気持ちをそれぞれが持つだけでも平和につながります。私たちには、当たり前の日常を未来につなげる責任があります。一人一人の思いは、集まれば大きな力になります。その思いを持つことは二度と戦争を起こさないために必要なことだと考えます。

「平和の為に私たちができること」

荏原第六中学校　　住田　彩葉

広島平和使節派遣を通して「平和」は一言では表せないほど深いものだと強く感じました。そして、新たな考え方を持つことができた充実した３日間となりました。

「平和」と聞いて、思いつくことは何でしょうか。私は広島に行くまで、戦争や争いがない世界、そして差別やいじめがなく一人一人が幸せに生きることが「平和」の全てだと思っていました。しかし、この訪問でいろいろなものを実際に見聞きして、考えを共有することで、様々な平和のとらえ方を知り、自分の考え方が大きく変わるきっかけとなりました。

広島の第一印象は、73 年前の姿を想像できないほどの賑やかさと、たくさんの緑でした。行き交う人々の笑顔がとても印象に残っています。私たちは、蛇口をひねれば水が出る、毎日学校に行ける、好きなことができる。それが当たり前の生活です。しかし、73 年前の広島は、そんな「当たり前」のことができず、ただ今を生きることでやっとだったのです。

被爆者講話では、大隅さんが当時の気持ちを語ってくださいました。親しい大切な人達を何人も奪った原子爆弾、そしてそれを落としたアメリカを「憎んでいない」と大隅さんはおっしゃいました。なぜなら、今を生き抜くことが大切で、そのことに必死だったからだそうです。これを聞いて明日はあたり前ではないことを知りました。大隅さんは、戦争がなく、楽しく家族とあたり前な時間を過ごせるだけで幸せだと感じていました。身近なちょっとしたことで幸せを感じられることはとても素敵なことで、その思いが増えたら、「平和」な世界に近づくのではないかと思いました。

意見交換会では、「平和」への考えを皆で共有しました。その中で、人によって「平和」は違うということを知りました。例えば、好きなことを楽しめる世界や、大隅さんのように身近な幸せを感じられる世界など、いろいろな意見を聞くことで様々な視点から「平和」について考えることができました。だから、学校のみんなにも「平和」について考え、他の意見を知り、様々な方向から「平和」を知ってほしいので、私はそのきっかけを作る人になろうと思いました。

私たちが今、戦争を止めたり、核をなくそうと思っても、そう簡単にはできないでしょう。しかし身近なことでも平和への第一歩になることはたくさんあるのではないかと考えました。それは、互いの考えを知

り、優しさを持つことだと思います。優しさで人を幸せな気持ちにすることは、平和な世界を作るうえで、とても大切なことです。だから、今の「平和」な日々を守る為にも、今回ヒロシマで見たこと、考えたことを忘れず、優しさをもって「平和」な世界を作りたいと強く感じました。

託された使命

戸越台中学校　清水　結莉

「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。」

これは平成30年（2018年）8月6日に行われた広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式の誓いの言葉だ。私はこの言葉がとても心に響いた。

73年前の8月6日午前8時15分、広島に「絶対悪」と言われる原子爆弾が投下された。きのこ雲の下では何の罪もない人々が殺された。昭和20年（1945年）8月6日から同年12月末までの死亡者数は約14万人と推定されている。今まで奉納された原爆死没者名簿に登載されている人は31万4108名にも上る。しかし、いまだに亡くなった方の正確な人数は分かっていない。

平和記念式典が行われた日の午後、私たちは袋町小学校平和資料館や平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れた。多くの方の遺品が展示されていた。それらはどれも原形がわからないほど焼けた後があった。その中でも私は国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で知ったことにとても心が打たれた。それは爆心地から1kmにも満たない場所で被害を受けた広島県立広島第一中学校だ。当時は県内屈指の名門校で目指していた学生も多かったそうだ。8月6日の朝、「行ってきます。」といつものように家を出て学校に向かった。その日は奇数組が外で建物疎開、偶数組が教室で待機だった。そんな時原爆の被害にあった。一中の生存者は10人にも満たなかった。「一中の生徒は全滅だ。」という言葉が生徒の両親の耳に入ったそうだ。私には想像もつかなかった。私と同じ中学生なのに…。とてもとても尊い命なのに…。生きいていた時代が違うだけなのに、こんなにも苦しくて悲しい経験をしたのだ。考えただけで胸が痛くなった。だから私たちは73年前の中学生たちがどんな思いで必死に生きようとしたのかを知らなければいけないと思う。

73年という月日が広島を復興させてきた。73年という月日をかけて広島は原子爆弾の怖さを世界に伝えてきた。実際に被爆された方も辛さを乗り越え、当時のことを語ってきてくれた。私たちは原爆のことをもっと知らなくてはならない。そして後世に伝えていかなくてはならない。それは、被爆者が年々減ってきている中、日本を原爆が落とされた最初で最後の国にするためにも。私たちには未来がある。遠い遠い所まで未来がある。その未来をずっと平和で過ごすためにも昭和20年（1945年）8月6日午前8時15分に何が起き

たか知らなければならない。伝えなければならない。それが私たちに託された使命だから。

「平和」とは何か

日野学園　鈴木　茜

今、あなたが見える景色の中から、希望の光が消えてしまったとしたら、あなたの大切なものが一瞬にしてこの手から抜け落ちてしまったとしたら、そんなことを想像しながらこの感想文を読んでいただけると光栄です。

「平和」とは何か。戦争をしない、争いをしない。果たしてそれらだけが「平和」なのでしょうか。それならば、今、日本は胸を張って「平和な国である」と言えるのでしょうか。この簡単なようで難しい問いを明らかにするために、私は広島平和使節派遣に参加しました。

広島に着き、街を見て思ったことは、東京と変わらず、賑やかな都市だということです。この地で73年前に原爆が落とされ、75年間、草木が生えないと言われていたとは到底思えませんでした。しかし、被爆者の講話を聞いたり、原爆ドーム、平和記念式典、平和記念資料館に行ったりしたこの3日間で、改めて戦争の悲惨さを痛感することができました。

「平和」とは何か。この問いが明らかになったのは、ある2つの言葉でした。

1つ目は、初日に聞いた被爆者講話での言葉でした。話してくださったのは、八十歳の大隅勝登さんという方です。大隅さんは大きな病気に何回もかかったそうですが、私たちのために熱心に話してくださいました。7歳のときに被爆し、頭、肩、胸、背中にガラスの破片が刺さったそうです。しかし、痛みも感じずに急いで家に戻ったとおっしゃっていました。そんな耳を塞ぎたくなるようなお話を聞いた最後に、私は大隅さんに質問をしました。私が「戦争によって多くの人が苦しみ、それを踏み台にして今の日本があるということについてどう思いますか。」と聞くと、少し静まりかえり、大隅さんは低く、悲しい声で「・・・人ごとだね。」とただそれだけをおっしゃいました。

2つ目は、2日目の広島平和記念式典に参加したときの言葉でした。真夏の暑い中、多くの日本国民、そして多くの外国人の方々が参列していました。式典の中で子ども代表の2人が発した「私たちは無力ではない」という言葉を聞き、前日に聞いた大隅さんの言葉を思い出しました。前日に聞いた大隅さんの「・・・人ごとだね」という五文字の言葉を思い出し、ハッと気が付きました。私たちは被爆者ではないので、その方の想いを知るには限界があります。それでもその方の想いに近づくことはできるのではないかと思います。だからこそ、相手の気持ちになって考え、相手の立場にたって想像することが「平和」であり、「平和」を築くことなのだと気付かされました。「平和」のために行動すれば必ず誰かに伝わります。無力だと思っていた私に勇気をくれました。

「平和」とは、相手のことを思い、相手の立場になって考えることだと思います。

そして、この「平和」の意味を多くの人に伝えていくことが、私たちが築ける平和なのだと、この３日間を通して強く感じました。また。戦争は、人生そのものや希望を奪うものなのだと改めて感じました。

最後になりますが、私を広島に連れて行ってくださった先生方、両親をはじめ、たくさんの方々に感謝し、今できることを考えながら強く生きていきたいと思います。

「平和とは」

伊藤学園　鈴江　翠花

皆さん、原子爆弾を知っていますか？そして、原子爆弾は恐ろしい武器だということを知っていますか？

私は今回の広島平和使節派遣で、平和について学ぶことができました。私はその原子爆弾についてこう考えました。

「原子爆弾は、あってはならないもの。

原子爆弾は、つくらせてはならないもの。

原子爆弾は、被害にあった人を一生苦しめるだけでなく、使った人にも一生後悔の念を抱かせてしまうもの。」と、考えました。

原子爆弾は、この世界にあってはいけないもの。つまり、原子爆弾は、何万人、何十万人、何千万人の人の命を奪うものです。そのような原子爆弾は、使うための研究や、つくる工場もあってはなりません。そして、つくるのも使うのも許さない社会であるべきです。使った人は、一瞬のうちにたくさんの命を奪い、その後、むごさのあまりに罪の意識にさいなまれるでしょう。被害を受けた家族は、一生そのことを悲しみ続け、原子爆弾を使った人を一生恨むことになってしまいます。お互いに幸せな人生を送ることができないと私は学ぶことができました。

そして、1945 年、８月６日、午前８時 15 分。原子爆弾が日本の広島に、落とされました。約 14 万人以上の人の幸せ、命を失いました。

その日から 73 年が経ち、私は、平和記念式典に参列しました。式典には、大勢の人が参列しており、私は外国人の方々が多いと感じました。こんなに多くの世界の方々が、広島への原子爆弾投下に関心をもっていることや、「核兵器禁止条約」について世界で話し合われていることを知って、平和に近づこうとしていることを実感しました。

そして８時 15 分、私は亡くなった方々に黙とうを捧げました。大変静かな空気の中にいて、被害者の家族や、友人、その他の人の悲しみがひしひしと伝わってきました。続いて広島市小学校６年生による「平和の誓い」を聞きました。私は聞いて以下のところについて考えさせられました。

「人間は美しいものをつくることができます。

人々を助け笑顔にすることができます。

しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。

平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。

平和とは、夢や希望をもてる将来があること。」

私は、考えました。人間は他人を感動さ

せることもできるが、他人を悲しませることもありえる。平和とは、自然に笑顔になることができ、幸せで、将来に夢があることだと私は広島派遣で学ぶことができました。

『世界につなぐ平和のバトン』

八潮学園　石　弥織

一九四五年八月六日、午前八時十五分。広島に落とされた大きな原子爆弾。その場にいた誰もが想像すらしていなかったほんの一瞬の出来事。その一瞬の出来事は、たくさんの人々の命を奪うだけでなく、人々の身体や心に一生残る傷をつくってしまったのです。

わたしは、今回の派遣で戦争や原爆の恐ろしさや戦争に対する人々の想いを学びました。

派遣一日目、広島に着いて最初に感じたことは、「本当にこの地に原爆が落とされたのか」という気持ちでした。広島の街は、路面電車が行き交い、人々は楽しそうに笑っていて、活気あふれる街でした。

被爆者講話では、被爆者である大隅勝登さんにお話を伺いました。大隅さんが被爆してしまったのは小学三年生の頃だったと聞いて、今の私よりも小さい年齢で被爆してしまって本当に辛かっただろうなと思いました。

大隅さんのお話はとても衝撃的な内容で、私は戦争の恐ろしさを改めて実感しました。今回の被爆者講話でお話を聞き、大隅さんを始めとする被爆者の方々は。身近な人や自分の幸せなど数えきれないほどたくさんのものを戦争に奪われてしまったと知って、二度と同じ過ちを繰り返さぬように、私たちが平和を伝えていかなくてはならないと強く感じました。

派遣二日目、この日は年に一度開かれる、平和記念式典が開かれました。その時に頂いたパンフレットに記載されていた子ども代表の「平和の誓い」に目を奪われました。その中の「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。」という言葉が心に深く残りました。同じ人間どうしで、争ってしまうのは本当に悲しい事です。だから、お互いを認め合いながら生きて行ける平和な世界になるよう私たちの世代から一人一人が考えていくべきだと思いました。

派遣三日目の碑めぐり講話では、たくさんの碑を見させていただきましたが、一つ一つに平和を願う人々の想いが込められていました。この場所でたくさんの尊い命が奪われてしまったと思うと、本当に胸が痛みます。

当たり前だった日常を一気に壊されてしまった広島の人々。その日常を取り戻すために、変わり果ててしまった自分たちの町で何年も何年もどのような想いで生きてきたのでしょうか。今の私たちは、家族や友達がいつも隣にいて、当たり前のように毎日学校に通っています。けれど、今の日常があるのは、多くの被爆者の方々のおかげです。だからこそ、この時代に生まれた私たちが、平和のバトンを次の世代に渡

す努力をすることが、世界中の平和につながっていくと思います。

核兵器なき世界を手にするために

荏原平塚学園　麻生　和勇斗

広島平和記念資料館で、入り口近くのパネルにあった少女の言葉が目に入りました。「国にとって父は何十万人の中の一人だったかもしれません。でも私には父が全てでした。」何万人死んだなどという、数字で表すことのできない悲しみ。全てをあの日に奪われてしまった人達の霊を偲び、その実態を知り、僕達はその場を離れられませんでした。

八月六日の平和記念式典では、八十を超える国々が参列し、多くの人々が、平和を祈っていました。核兵器廃絶への思いをこれだけの人が持っていることに驚き、広島市長の「核は無くさなければならない絶対悪である」という強い思いに共感することもできました。

被爆者講話では、小学校三年生で被爆された大隅さんの心の内を聞かせてもらいました。幼かった大隅少年は、突然カメラのフィルムを通したような光が見えたと思うとその後どうなったかは分からず、走っている中、民家が二軒焼けていたのは覚えていたそうです。家に帰ると頭、肩、胸、背中に刺さっていたガラスをお母さんが水で洗い流し、つばを付けてくれました。今はどこの家にでもあるガーゼや包帯、消毒液も戦時中はなく、必要最低限の治療もできませんでした。終戦後も舌癌や肝細胞癌に悩まされ、心身を蝕まれながらも、妻がいて孫もいて、幸せだと言われた大隅さんに、胸につまるものを感じました。年々少なくなっている実体験者のお話を多くの若い人々に伝えることが僕達の使命であると思います。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、佐々木禎子さんの千羽鶴のお話を読みました。原爆症が治ると信じて鶴を折り続け、家族や家計のことまで考えていた優しさを見、思いやりの深さに驚きました。

碑めぐり講話では、西岡さんのお話で、新しい事を知ることにもなりました。原爆が落とされて広島はひどい惨状に見舞われました。しかし、日本ばかりがひどい目にあったのではなく、日本も外国に戦争でひどいことをしてきた事を知り、「加害の面がある被爆」という言葉に強く胸を打たれました。家族や友人、学校を失ったつらさ、原爆への恨み、それも忘れてはいけないことではありますが、物事には多くの面があり、一方から見ただけでは分からない事があるのだと思いました。

広島から帰宅後、祖父が録画してくれていた番組で、福山工業高校で代々続けられている、より立体的に広島のあの日をVRで再現する活動を見ました。被爆中心地にあった島病院周辺の町並みに原爆が落ちる直前、直後の変わりようからCGで再現して伝えようとしていました。真剣に考え活動している姿を見て、広島

派遣での体験と合わせ、私達一人一人に何ができるか、何をすべきかと言うことを、人任せにせず考えながら生きる事が大切だと感じました。

73 年経った今

品川学園　折原　羽海

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。

ヒロシマは一瞬にして地獄と化しました。平成最後の夏、私は初めて広島を訪れました。

第一印象は東京よりも涼しいという感じでした。街並みも東京にありそうな感じで不思議な感覚になりました。でも、路面電車を見て、品川区と違うなと感じました。

初日には、当時小学 3 年生で被爆された大隅さんに講話をしていただきました。死体が川に浮いているのに、誰も引き上げない話や、死体特有のにおいの話など、たくさんの体験を話していただきました。傷は少ないもの、放射線により細胞が壊され、白血病になった方の話も聞くことができました。本などからは得られない思いなどを話して下さり、所々目頭が熱くなる場面や、耳をふさぎたくなってしまうような場面もありました。

2 日目には式典に参列しました。平和の誓いの際に、小学生代表の 2 人が「人間は美しいものを作ることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものを作ってしまうのも人間です。」と言っており、その言葉が胸に響きました。式典には、たくさんの外国の方々も参列しており、平和について考えている人は沢山いるのだなと実感しました。

その後見学した資料館では、被ばくによりざらざらになった瓦や溶けた瓶などもありました。また、放射線は被爆後も長期にわたり影響を及ぼしていることが分かりました。今も苦しんでいる方が大勢いることに驚きました。被ばくした時に人が着ていた洋服などもありましたが、とても洋服と言えるものではありませんでした。

その日の夕方には、午前中にみんなで作った灯ろうを流しました。私たちが流したのはまだ午後 6 時過ぎで明るかったので、あまり中に入っている火が点いているようには見えませんでしたが、夜ご飯を終えて見に行くと、一つ一つがきれいに光っていました。灯ろうを流している人の中には、日本人だけでなく、外国の方々もいました。そこには大きく PEACE と書かれているものが多かったです。日本語で書いてあるものもありました。その中で私は”world PEACE. No more war”と書かれているのに目が留まりました。世界平和。もう戦争はおこしません。世界の人が平和を願い始めているのだと思いました。流すときにも、世界平和と言いながら流しており、改めて平和な世が続けばいいなと思いました。

路上には、自分で作詞・作曲したであろう平和の歌を歌った人もいました。そこでは、女学院の碑や原爆の子の像などについて、1 つ 1 つ説明をしてください

ました。被爆した方の中には、自分も死にたいと思う方もいたというお話を聞きました。碑めぐりの講話をしてくださったのは、被爆２世で原爆投下後から10年後に生まれた西岡さんです。西岡さんはお母様が被爆していて、そのお母様についてもたくさん話してくださいました。

今回の派遣で、改めて平和の大切さを意識しなおしました。今、ご飯を食べられること、外で遊べることは、平和だからこそできることだと私は思います。私はまず平和についてよく理解するには、戦争の残酷さ、平和の尊さをしっかり理解するところからだと思います。そして、皆さんに分かってもらいたいことは、たくさんの方々がなくなり、平和に向けて復興しようとした方々のおかげで今があるということです。平和を願う人が増えたら増えた分だけ平和につながると思います。

平和とは

豊葉の杜学園　　山下　悠眞

８月６日、町は燃え、人が亡くなり、活気のあった広島はあとかたもなく消え去りました。

私達の想像をこえる恐ろしいことがこの「広島」で起こったのです。

今回、広島を訪れ「平和とは何か」をずっと考えていました。広島を訪れる前は「戦争のないこと」や「今の生活」などありきたりな言葉でしか表すことが出来ませんでした。

しかし広島を訪れ、昔の日本にあったことを知り、被爆者の方のお話を聞き、「平和」を身にしみて感じることが出来ました。

私の思う「平和」とはありきたりな言葉ではなく「ただただ生きていて不自由のない生活を送れている」ということと「1人の力では平和はつくれない」ということです。

被爆者の方のお話で『今の生活は幸せですか』という質問に対し、『とても幸せです。今は孫もいて楽しいです。』と答えていました。今の平和はみんなが、「平和であってほしい」と願うから叶っていることです。このとき私は平和であることは幸せと同じものなのだと思いました。

広島では色々な場所を訪れましたが、私は２つのことが印象に残っています。

１つ目は原爆ドームとその周辺を見たことです。原爆ドームは爆心地にとても近く、建物は一部倒壊していたけれど原爆ドームだけは人々の希望により今まで残しているそうです。

この原爆ドームには、もう２度とこのようなことは起きてはいけないという願いが込められていると思いました。

２つ目は被爆者の方のお話です。被爆者の方は大隅さんといって当時９歳でした。被爆当時は、登校中だったそうです。空がピカッと光り、その場にしゃがみこんだそうです。しばらくして家に帰ると、大隅さんの顔や手足にはガラスの破片がたくさん刺さっていたそうです。被爆後の川は、やけどなどで水を欲する人や死体で埋め尽くされ、町全体は異臭がして、

黒い雨が降り、皮膚がただれている人が多かったそうです。そんなことが起きた後も原子爆弾は、大隅さんを苦しめました。被爆して何年か経つと、放射能によるがんに侵されてしまいました。原子爆弾を落としたのはアメリカです。しかし大隅さんはアメリカのことを憎んではいません。『憎んでも仕方がない』と言っていました。

こんなに苦しんでいるひとがいるのに世界から核はなくなりません。私は、なぜ核が必要なのか分かりません。しかし、世界から核がなくなるのに１歩進む出来事がありました。北朝鮮が核廃絶を宣言しました。このまま核が世界から無くなることを願いたいです。

私は、このようなことがもう２度と起こらないようにするためにも、私達から周りの人に何が起こったのか伝えていき、みんなで「戦争はしたくない」という気持ちで一致する日が来るようにしていきたいと思います。

≪派遣生の感想≫　（一部抜粋）

Q. 広島に行く前と後で、平和に対して自分の中で変わったこと（もしくは、平和について改めて感じたこと・考えたこと）。

- 平和は、全員で作るべきもの。
- 平和であることはあたり前ではないこと。
- 「平和」という言葉でも、とらえ方がたくさんあるということ。
- 日本だけでなく、世界でみんなが平和だと思えるようになりたい。
- 言葉でいくら言っても分からないことがある。
- 今の生活の平和を多くの人に知ってほしい。今の生活では考えられないことが起こった戦争の悲惨さを多くの人に学んでほしいと思った。
- もっと平和について考えなくてはいけない。
- 平和に対する思いは世界共通だということ。

Q. 同級生または後輩へ平和について一番伝えたいメッセージは。

- 平和を壊すのは簡単だけど、平和を作るのは大変なこと。だからこそ、今の平和を大切にしてほしい。
- 平和とは、ケンカや小さな争いをなくすだけではなく、皆が自然に笑顔になれること。
- 戦争のことをよく知って、それが起こらないために自分のできることを考えることが、小さいけれど「平和」への一歩だということ。
- 平和は戦争を深く理解し、みんなに伝えること。
- 平和な世界を続けていくためには、一人ひとりが戦争は絶対にいけないということを頭の中に入れておくべきである。
- 日本で当たりまえに感じていることは世界では当たり前じゃない国もあり、だからこそ日本は平和だと言える。

4. 被爆者講話

被爆者講話

大隅　勝登　氏

【大隅】45 歳のときに舌がんを患いまして、喉の調子がじりじりしてこんなんです。しゃべるのは、これが精いっぱいの声なんですよ。おーい。これぐらい。大きな声を出さにゃいけんのんと、途中で咳が出たりする。風邪みたいにうつりませんので、これは。これ（スプレー式の薬を指す）を補給しながらやってみたいと思います。

じゃ、この赤いところが、ご存じのように壊滅状態。ほとんどと言うてええですかね。何人亡くなったかという数字が、いまだわからないんですよ。兵隊さんを入れて、数なんか、とにかく、ようわからんことが多いので、調べようはなし。そういうことで大変なんだけど。ここに工兵橋ってあるんですよ。ここの近くに、当時、小学校３年生に属しておりました。

それから、当時、４年生から６年生は、集団的に田舎のほうへ集団疎開をさせられていて、あと小学校３年生以下は、おじいさん、おばあさん、くるめて家の中で生活しなさいと、こういう時代だったんです。なので、私はこの辺の工兵橋というところの近くに、学校と言うか、寺子屋と言うか、勉強しに行きよった記憶がないんです。あいうえお、かきくけこ、そういうのは親が教えるべきだとか、何かようわからんかったんですが、とにかく、そういうことしか習った記憶がありません。それで、「いってきます」で行きよる最中の出来事でした。突然にピカピカと光ったら、ドッカーンという大きな音と悲鳴。それで、気がついてみ

たら、家に帰っていた。朝８時ごろだったけれども、「いってきます」と言って行って、帰る途中にそういうドカーンいう音で、ああ、焼夷弾でも落ちたんだなと思っていた。ただ大きな爆弾が落ちたとしか。原爆、水素爆弾。もう何か月たって、あれということで、その時は大きな爆弾としか私らはわからなかった。近所の家が２軒ほど燃えとるのがちらっと見えたと。それで角を曲がったところに石津さんという家が燃えとったから、そこから私の家まで 200 メートルぐらいの、ああ、もしかしたら、うちの家まで。すぐ燃え移るなと思いながら、「ただいま」って帰ったんです、家へ。それで、私とすれば、焼夷爆弾が、3，４つぐらい落ちたんだろうと思っていた。それで、家へ帰ったときに、うちのお母さんが私を見て、おーって。パンツ１枚に脱がして、全部着がえろと言われて、そのときの状況は、ここら辺にガラスのかけらがあったんです。肩のところと背中へガラスみたいな破片が入っていたんですね。そんなのがぴゃーっと水でただただ洗うてもろうて、おーい、きれいになったって。よし、今からすぐうちの畑へ行って、トマトをここの袋へ入れてこい。「それでどうするん」言うたら、「ばかたれ。早く行ってこい」言うて、うちのほうへね。ああ、山上って逃げるんじゃのと思って、今から見立山へ避難するけえ。消防車もおらんのじゃけえ、うちのほうもすぐ丸焼けになるけえと、それから見立山に行くことにしたんです。

それぐらいに、とにかく、すごくいっぱい焼夷爆弾が落ちたんじゃろうの、それで、とにかく気がついたら、その晩は山で寝とったか、起きとったか、これが覚えてない。そこら中に蚊がね、ブーンといたけど、ヤブ蚊との戦いを朝、昼ごろまでおったんじゃろうと思うけれど。そこで８月６日の夜を山で過ごしました。

８月７日の何時ごろかは、覚えていないんですが、川へ行ってみたんです。その前に家に帰ったときにびっくりしたのは、うちの家は燃えずに。ただし、家へ帰ったと同時にびっくりする。こういうふうな天井から全部やられて。一部、垂れ下がったり。廊下になっている床はなぜかなくなっとる。畳は窓ガラスの破片を受けて、あれは歩くのが難しいんですね、危ないから。気をつけ、気をつけって言われて入っていって。そこから神田橋へ行ってみたところ、そこの土手っ原に死体がね、ごろごろと流れておって。行ってみると、死体があたりに浮かんで、川を降りたり、上ったりしよるんです。何人かいるんです、そういうのが。あるいは原爆のラジウムとかそういう光線を吸い込んで、とにかく被爆者かな、みんな水が欲しゅうてかなわん。それで、そこへ行って、こ

うやって水を飲んで。それでね、死体を引き上げる人がいない。泳いで行って、死体を引き上げる。それだけの勇気がある人は誰もおらんかった。8月の6日、8月7日。そうこうしておる間で、土手へ上がっとる死体がウジ虫。そういうものがぼこぼこ出てきて、その臭いとか、さっきの死体が川づたいに全部、満潮、干潮で行ったり来たりしよったのを、すごい光景を今も覚えているんです。それから、そういう死体の処理は我々の焼却しかないと。8月の6日から8日にかけて、一気に、何万人の数をそういう形で焼いたんじゃないかと。埋めるところがないけん。焼けた人たちは、おじいちゃん、おばあちゃん、女、子供ばっかり。ぞっとするような光景だったね。死体や、その臭いって、生涯忘れることはできません。今でも覚えている。そういう臭いも、こうこう、こういう臭いがしたというのは、今ここでは言えませんけど。

次に亡くなった方の例を挙げます。私らが住んでいるところの近くに住んでいる方。旦那は戦争へ行って、それで、4年生と6年生の兄弟は集団疎開でよそへ。一番下のアキちゃんというのと二人暮らしで生活しとるときに原爆が落ちた。それで、たまたまイシカワさんが白島町の印刷工場で働いているときに、何やらピカッと光った後にドカーンって、気がついてみたらくらっと。什器の間に挟まれて身動きがとれず、8月の6日のお昼から8月7日の多分お昼ごろまで、わからんけど、誰かが助けよった。自分の家へ帰ってみると、ほとんど焼けて家がもうない。もう炎もくすぶっていて。それで、下におった小学校1年生のアキちゃんを探したけど、知り合いの人が預かっていた。ああ、生きてる。ああ、よかった、よかった。で、本人は、そのアキちゃんを探したヨシコおばちゃんは、ちょっと夕べから何も食べていないんだけど。傷も、やけども、こういうところは全然ない。全くない。建物に入って、ああ、くたびれたって本人もちょっと横になるってそこにグターって、横になって。それで、看病する人はコップで水ぐらいはと…。ちょうど食べたり、飲んだり、1人では今はできないけんが。とにかくそこへ横になって、ヨシコおばさんが。2日目ぐらいかな、トイレに行きたいんやと。これは多分鏡を見たかったんだろう。髪がばさっ、ばさっと取れる、抜けるんですよ。これは急性白血病やって言われたんや。

3日目、4日目ぐらいになって、2日目に、食べ物も欲しくない、ゲボをうーっと出す。何も食べず、水も、食べるものもなしで、24時間たって、また24時間たって、どうなるかいうのを初めて。後でわかったんですが、ゲボがばーっと出るばっかりで。洗面器、持ってこいと言ったと同時に、今度はハルオとサトコ、田

舎へ行ってからあれ、会いたい、会いたい。一番下のアキコとは、もう何も言わんで、ハルオとサトコに会いたい、会いたい。もう自分はだめだ思う言うね。もう肌で感じる。もうすごかったね、あれだけは。

当然、しばらくして、ハルオさん、サトコさんがお母さんに会える思うて帰ったら、お骨になっとる。そのお骨も確認したわけじゃない。とっとっとっとっ、何百いう、一遍に死体を処理するので、穴を掘るところもないし、ただ焼いてしかないという。焼いていくしかという。それも、次から次に、すっぽんぽんで焼くほうが一番いいみたいなんだが、何がしか着たもので焼くから、どうしてもボワーッと火が、燃え方があやふやもんじゃなしに。そういう焼却するのはまきです。まきがないので、崩壊した、焼け残った、まだ崩れている家の廃材を利用して、それをたき火じゃなしに、もうそれで焼いたと。

広島中の人たちは、その臭いが当分、体にしみついたり何かしていたんじゃないかね。それが何とテニスコートをやるぐらいの小さな牛田の公園で、800 体から 840 体と言われております。これは全く数量確認ができておりません。700 人おったか、900 人おったかも定かでなしという。今じゃ考えられんことを当時は二次災害を恐れて、爆弾のそれじゃなしに、放っとったら蔓延するじゃない。灰、猫灰だらけじゃないが、そういう。それを警戒したんじゃろうね。

それから、次に、逓信関係のお仕事をされていた人のお話をすると、逓信関係の通信業務で、7 時ごろ会社へ行って、早出で、何か 7 時か、7 時半ごろだったか、ようわからんけど、B29 か何かが通ったような気がするが、サイレンが鳴らんけん、変じゃろうなと思いよったと。それで、仕事を当たり前のようにしよるところ、私はピカっていうのとドカーンいう音を記憶していたんですが、そのシゲモリさんが見たのはシュルシュルシュルいうような音がして、ガーンいうたらパーンと飛んできて、爆発音。眼鏡がすっ飛んだそうです。あっと思って、眼鏡が折れて、ここに何かガラスがあったんじゃろうね。こうやって取って。それで、途中で気がついて、こうやってやりおったけど、何かごみが入ったんじゃろうと思い込んでて、その人はそのまんま仕事をして。私も、小さいころの記憶ですが、そのおじさんはずーっと義眼のまんまだったそうです。普通の眼鏡をかけとったのでわからんかった。こっちが見えけんで、黒い眼帯の上に眼鏡をかけて。じゃけん、自動車も運転ようしよったけど、免許証は自動車の運転はなかった、完全に片目の人は難しかったんじゃないかね、その当時は。一生涯、義眼のまんまの不自由な生活をされていた例をあわせて報告。そ

れから、この方は亡くなったのは動脈瘤破裂でした。

次に、3人目、兄ちゃんの場合は、このお兄ちゃんの場合はやけどでね、足のほうもやけどがあるけど、膀胱炎。膀胱がんの判定を受けて、おしっこしたいな思うて、たたたっとトイレにかける間に、もう間に合わんの。女性の人は男性、違うけんね。たったこれぐらいなのに、もうズボンにじわーっと。当時は国防色のようなズボンしかないので、それじゃけえ、初めお母さんに怒られた。おまえは早く便所へかけろと。2回目なんですね。いっつもこの辺がシミになって。誰かが臭いって言うたか知らんけど、臭い思われるけん、何じゃろうね、女の子、何か遠ざかっていきよるし、おしっこについて、一番のあれよ、情けないことだろうね。たったこれだけのおしっこでも、積もり積もりよると臭うんだろうね。だから、臭い思われたらいかんいうのが大変だった。

ちなみに、終戦直後の話、8月15、16日ぐらいから、だんだん復興とか何やかんやもあったんですけど、これを思い出すと大変なことになるんで。今度は肝心の、その前に、青いトマトの例。これはうちのお母さん。立派な母親だったいうところを話したい。実はね、ぱっと考えたんです。米やら、何やかんや、ろくなのなかったけども、米があったところで炊くところもありませんのに。トマト、袋いっぱい、とにかく、おまえ、持てるだけ、これいっぱい入れてこい。見立山へ持っていくんじゃけえ、青いのを下へ置くんじゃけえな。実はトマトって、青いトマトいうのは食うたことがない。赤くなっているのが一番うまい。端から。できる端からこうやって拭いちゃ、食ってやったけども。下に青いのをしてやるんじゃよって。はい、言うて。また怒らしちゃいけん。思って入れていった。

それで、明くる日、8月7日に、昨日のトマト、どこあるん言うて、うちのお母さんに聞いたら、食べたい。何を考えとる。あるわけない。これはやっぱり何時間か何かに1個、引っ張り出してくれよったんです。それで山へ逃げて別の被災者を見つけてね、田んぼの中で、トマトくれる。それが欲しいって、頂戴よって。ええよって。二、三個やったら、あっという間に人が集まって、隠した。それで結局、あっという間に、それぐらいの大きさかな。これぐらいの大きさのトマト、青いトマトばっかり。それを全部、もう帰るときにはなかった。全部、配って。配っとるし、自分たちも欲しかったんじゃが、なかったね。畑へ行ったら、まだあったんじゃがね。帰ったときはね。しばらく食いつないだのは、ほかのことで食いつなぎしておりました。

それで、肝心な私の例になると、22歳

で大学卒業して、28 歳ぐらいで、某中小企業の会社に入りました。当時いうたらね、就職難の時代よ。で、就職して、27、8 ぐらいのときに、とにかく体がだるくていけんのです。これはやっぱり病名はよくわからんだけども、慢性肝炎いうてかね、慢性的に悪うなって。だから、入院して、2、3 カ月、入院しとったらきれいに治るんじゃがのと言いながら、注射等、何やかんやで、何とかやってきました。それで、その後、順調に生活できたし、45 歳のときに舌がん。べろのがん。あとは、大きい病気といったら、大したのはないんです。実はこの舌がんから発生して、ここへ、ここらの病気を肺へ行かさんために、何ちゅうけ、ようわからんけどとめるわけ。そこへとめ切れずにリンパ節もがんになる。でも、しようがないけえ、ここをばさばさっと切ってやる。それで、これが 46 歳のとき。それから、今度は大好きなたばこを休み始めた。45 歳だと思う。やめるわけじゃない。休む。せっかく人間だけが吸えるのに、たばこね。これをやめちゃいけん。実はそのときに父親が専売公社に勤めていた。たばこは親孝行じゃけん。

ところが、これは目のこの手術のときがね、最高にしんどかった。広島大学病院でばしゃーんと切って、この辺とかこの辺で引っ張り出してつけるいう方法があるという説明を受けたんだけど、しかし、それよりも前に、これをラジウム針によって退治する方法がある。ラジウム針いうても原子力だね。それを放射線混じりでやったんじゃおかしくなると。それをこの針にべろへ 10 本突き刺して、それで 10 日間、計 21 日入院していた 10 日間はそれで苦しみましたね。これを突っ込んだラジウム針を落ちちゃいけんけえ、全部ここでくくってあった、指のところへ。だから、ご飯は流動食しか食えん。それを鼻から食べさせて。毎日 2 本ほどもらったけれども、初めてそういう治療を受けたのが 10 日間かね。もう面会は謝絶、そのかわりテレビは見放題、ラジオも見放題。ご飯は自分で食べなさいと。ここから、鼻から突っ込んで、味も何もない、うまいとか、辛いとか、酸っぱいとか、わからない。急いで入れようと思ったら、もう下痢するんや、ピーピー、ジャージャー。じゃけん捨てよったら、こりゃいけん思うて、最終的に朝、昼、晩、2 本ずつのが、1 本飲んだことにして、1 本は隠して、ばれなかったがね、ねっ。家族にも会えんし、とにかく面会は……。もう、がん細胞はもうそれで終わりと思うたんじゃけど、丸山ワクチンとか、いろんなことをね、やったんです、そんときに。それで、5 年ぐらいやったんかな。もうがんとおさらばじゃ、やーいと。ところが 73 歳のとき、肝細胞がんいう病名をもらって、肝臓がんでした。これは、うまいぐあいに 3 割ぐらいを切って、肝臓が

ね。で、7割を残していう状況やったんです。壊れないのよ、肝臓が。わしゃね、こんなもんじゃないか思いました。これはね、このように切ることができるんです。これは。こうは切れんけえ、こう切れるんですわ。それで、こちらが70%ある、残りがね。30%。多少、普通の人たちよりは、これぐらいのところがこうなっとるよと、肝臓が、私の場合は。これを3年間ぐらいは、73歳、74、75、76、最終的には4回目、一番最後が62時間の大手術して、大したもんじゃろ思うたよね、28%、やって、今再発はなし。

たったこの間ね、6月に検査があって、肺のほうへの転移はない、大丈夫だとお墨付きをもらって今日の日になった。移らせちゃいけんけえね、被爆の勉強しに行って、移ってきたんですよと言われとうないし、そういうことがあって、もう、それはそれで。で、そこで初めて、助かったんよ。

最後の76歳のときがね、ちょっと、深いところにあって、それまでも、ちょっと、30日がパアになって、2カ月間ね、風呂に入っちゃいけん、シャワーも無理、体中がかゆいし、もうね、そんときの状況いうたら、人に言われん。肝臓。で、55歳のときに……、話がさかのぼるんですが、この黒目のこっち側のほうに、黄斑症いう、黒いの、突然見えんようになる。何かのことでなるらしいんじゃけど。で、眼科の先生のとこに行って、もう、右目はこれで、まずそこで目を手術してもらって。こういう、顕微鏡みたいなのを持ってきても見えん。しかし、こっちのほうから押されると何でも見える不思議な状況があったりして、何かな思たんです、アゲイシ先生、相談して、そこでね、もう、こっち側だったら、左目は一生、うちが保証してあげるけえ、左目はずっとええよと、あなたが死ぬまでは。今までこっち側だけが、こっちが、鼻の穴の、下のこれ、当時ね、風邪引いたりして詰まったら、こっちではあはあと息すりゃいいけど、片っぽだけあけとるんですわ、鼻も耳も。同時に、こっちが聞こえん、こっちが聞こえん、どっちかがあるんですわ。とにかく安心しときんさい、ほいじゃ先生、暗いところで本読まんようにとか、何やかんや言われてから、無理して目といつも明るうてやれるってもんじゃなし、無理する場合もあるな。そういう場合は、眼鏡かけとうないけどもね、ほじゃけえ、安心しときんさい。私は実際はね、これって読めるんよ、眼鏡もなしで。白内障の手術しとるからね、昭和20年8月6日の、これにしてもね。関西のイハラ病院、初の30%除去、60日間帰さん。で、こがんして、62歳で転職、ほじゃけん、これを出しても構わんのよ、こうしたとき。ほして、格好いいやね、ないほうが。ねえ。で、年とるとね、ここがね、曲がってくる。

どうやっても、ここ、たるみが出る。たるみが、隠すたびに、眼鏡でそういうふうにして、これで隠しとる。そういうことで、安心した。

今、実は一生懸命やりよった会社も55歳で一度やめて、健康に関する仕事をしとって、そういう世界に飛び込んだの。で、62歳で会社を興して、80歳で、まだ現役の途中です。仕事をしながら、こういう被爆体験証言者として、広島にはこういうことをやりよる変わった男がおるで、よくそれは、ツボイスナオ先生の写真がどっかで出てきた思うが、あの人が93歳かな、今、現役でおってんよ。そこら中、医者通いながら、何やかんやと。いつも、「何もやることない」って言うと、「みんなに元気を与えるために、表現活動をせえ」と言うわけですよ。「はい」言うわけです。このとき私はね、一旦約束したら絶対に、今日、例えば調子悪なったとして、「すいません、ちょっと行けません」なんて言われませんやん、せっかく皆さん今日来てくださったのに。必ず1時間前に行って、これをやってやること、そう思うんです。

1つだけ。これは亡くなった人からの手記をいただいとるの、これだけ発表させてください。これをやり始めると2時間かかるけど、省略して1分ぐらいでやります。

「原爆の恐ろしさは、当時、広島にいて洗礼を受けた人以外には、いかに口で幾万遍となえてもわからないじゃろう。現在では、この原爆の千倍程度の水爆も完成しているとのこと。万一、これを使用することともなれば、地球上の人類は全滅するほかなく、この際、国を挙げて原爆兵器の使用禁止を叫ぶべきであると思う」いうて、手記を書いてもらったわけ。このときにね、水爆の話が出てないんで、わりかし早いときに書いた手記なんです。はあ、ええこと書いたな思うて。

それから、私は62歳で会社を興すときに、小学校時代の先生、もう亡くなったけども、テラニシ先生、音楽の先生が、4、5、6年、3年間教えてもらった先生、ずっとつき合いで、62歳である相談に行ったときに、怒られまくったのよ。ばかたれ、ばかたれ言って。「家族に相談なしに、またおまえは勝手に、会社して社長なんて、ばかなことをする」。「何歳までやろう思いよる？」「まあ、会社興して、10年やそこら」と。そしたら、「ばかたれ」言うてね、今まではないが、ばかたれって怒られた。「62歳の倍、124歳を目標にやれ」言われて、「はい」言うて。うっかり言うたんじゃが、考えてみたら124歳いうたらね。今80じゃけ、まだあと44年も……、何ぼ何でも限界よのう思うんじゃけど……。

よいしょ。そんなことがあったりして、質疑のところへ移りましょうかね。

～ 派遣生との質疑応答 ～

【住田】さっきお話にもあったように、たくさんの身近な人とか大切な人を亡くされて、原爆を落としたアメリカを今、憎んだりとか……、憎いっていうか、そういう、何でこんなことをしたんだっていう怒りとか、そういう気持ちをアメリカに持っているんですか。

【大隅】実はね、思っててもどうしようもできんけん、その話は、これは悪いんじゃが、どうしようもないんじゃけん、そう言ったらドイツや、ヒットラーね、あれはもう、怖い話。どうなんじゃろうか思うじゃない。ね、不思議に、あるよね。ようわからんけど、我々は。そういう、ごめんなさい、答えがわからんです。

【野村】疎開をしたときに、周りの人たちとかは、どういう反応をされてたんですか。

【大隅】ああ、疎開へ行かされたわけじゃないのよ。小学校 4、5、6 年生は集団疎開で行かされたので、違います。そういうことを全く知らんかったので、じゃけん、コメントのしようが……、ごめんなさいね。

【麻生】学校から帰ってきた、帰る途中に爆弾が落ちて、ピカッとなって、いつの間にか家に帰ってたというふうに聞いたんですけど、母親が見たときに、ガラスとかみたいなものが少し刺さってたというふうに言われていたんですけれども、そのときに体に痛みとか、そういうものは感じたんですか。

【大隅】そのときをもう一回再現すると、ピカピカッと光って、こうした先に、ドカーンと音がして、一目散に家へ向けて帰ると。だから、もう、覚えてない。そして帰ったら、あんだけの状況じゃ、この辺へ傷がついて、この辺に血がついとった、背中も。バシャッと水をかけて洗うて、はい、終わり。トマトとってこい言われて、山へ逃げて、それだけよ。

【二上】原爆が落ちる前とかに、いろいろ、空襲とかもあったと思うんですけど、原爆とそれ以前の空襲とで、大隅さんが感じたときにどういう違いがあったと思いますか。

【大隅】小学校の 2 年や 3 年ぐらいの場合は、ようわからんのよね。何か、サイレン鳴ったら防空壕へ急げよと、子供扱いじゃけ、はよここ引っ込め、地下のちょっとしたところへ、もう、20 人ぐらい入れりゃええような穴をそこら中に、空き地に掘って、薄暗いとか、中に電気もないし。ようわからん。あんまり、7 歳やそこらだと何でも食べて、あるもので。イナゴ・ドジョウ・大根、ただで食べられるやつ。以上。

【金子】原爆が落ちたときの、ごみがあるじゃないですか、廃材みたいな。それはどこにやったんですか。

【大隅】廃材はね、廃材ね……、どうしたんじゃろか、わからんのう。死体だけはまだ強烈に覚えとるけど。多分、この界隈から、さーっと……、ここは偉そうに公園みたいになっとるから、中に置いといたんじゃないかね、廃材を。あれだけの、どうもしようがないよね。焼いても焼いても焼けんわけじゃけ、セメントなんか焼けんもんね。鉄も、わからんね。

どっか大きなとこでそんなのもやったんかもわからんが、わからん。わからんことだらけ。

【桜井】大隅さんにとって、今の生活っていうのは幸せですか。

【大隅】うん。生きとる幸せがあるね。2人の娘がそれぞれ3人ずつ子供をつくって、私は経済的に2人しか子供がつくられんかったけえ、3人ずつ、娘が嫁いだ先で、長女は、男、女、男。次女は、女、女、女。さすがに4人はおらんけども、立派に生活できとるけえ、よかったなあ思うし、答えはそれぐらいかな。

【小倉】原爆が落とされた後、一瞬で焼け野原になって、その後の復興ってどれぐらいの時間がかかったんですか。

【大隅】これって、まだ、時間経ったところでも、自分自身がなぜこういうことをやりよるかいうと、二度とこういう目、皆さんにしてほしくないのね。人間、鉄砲持った先祖が、ばーっと粉をまいたら、めちゃくちゃじゃん。核いうのはそうでしょう、絶対に、そういうふうに思うね。答えにならんかった。そう思う。

【鈴木】乾パンとか配給とかで苦しい生活をされていたと思うんですけど、その中で、広島に原爆が落とされた前と後で、やっぱり後のほうが、ご飯とかは少なくなったりはしたんですか。

【大隅】めちゃめちゃ食うもんがなかった、しばらく。しかし川はね、死体が、こう浮いとったけえね、入ってエビじゃ、何かとるのも厳しいよね。だからカエル、食用ガエルは持って帰ってね、大人に焼いてもらうんよ。うまいんよ、これが。これが一番ええ。ありがたいこと。ずっと、四六時中腹が減っとる。いつでも腹が減っとる、おかしいぐらい。

【鈴木】もう一つ、聞いていいですか。参考書とか、広島の……、私たちの1個上の先輩が行ったときの広島での、被爆者の方々に聞いたときの感想文などを読んだんですけど、そこには、大隅さんみたいな人たち、被爆者の方たちがいっぱいいて、それを踏み台にして今の平和があるというふうに皆さん書かれていたんですけど、原爆を落とされた……、落とされることはすごくよくないことで、絶対にやってはいけないことですけど、被爆者として、日本だけが平和を第一に考えられるということでは……。原爆が落とされたからこそ今の日本があるって考えるのは、何か、いいことなのかなって、思って。

【大隅】それって、そういう考えは、私はようしないね。不思議とね、歴史をずーっと勉強しまくって、それでもやっぱり、日本軍、支那を相手にとか、あっちのほうの敗戦も、相当生臭いのをやっとるよね。そしたら、そこも取り上げてわいわい言うたところで、人ごとよ、わしら。それよりか、まあ、男と女おるんじゃけ、向こう三軒両隣、とにかく近所の人に嫌われたんじゃいけんわいね。まずそこから生活を立て直していきゃって思うよ。一番難しい質問じゃけども、ようわからん。ようわからん生活に追われっぱなし。

【山下】さっきのお話でも、近所の人とのつき合いは大事って言ってらっしゃっ

たんですけど、食料や水がない中で、少ない物資の中で、近所の人と取り合いや、もめごとになったことはないんですか。

【大隅】ないね。いや、あったんじゃろうけども、ない。誰かが気を配ったんじゃないかね。今でこそあれじゃろ、昔は一番困ったのはトイレ。ぼっとんじゃけ、ジャージャー流れる洋式トイレは当時はないけえ、あれが一番困ってたんじゃないかな。新聞紙が、うんちは、新聞紙で、こうやって、ほんまに。だから、そう不便は感じてないから。

【清水】戦争があって、空襲があると、やっぱり学校も焼けてしまってないということで、よく、青空教室というのをやってるというのは、結構、小学校の戦争の勉強などでも習ったんですけれども、そういうのも実際に体験されたりしたんですか。

【大隅】私は、終戦直後、すぐ普通小学校へ復帰できたけえ、何とか。そのかわり、運動会的なものはない。なぜなら、グラウンドが野菜畑になるんですから。スポーツするためのグラウンドをね、野菜畑に。けど、そこ、掘ったとしたら、下にがれきが入っとるかもわからん。多分あれじゃないかね、あれだけの廃材を、あっという間になくなるはずがないよ。平和公園の、この下の。多分、この界隈なら、あるわい。

【田中】原爆が落ちたことで、環境や生活が変わったということなんですが、今も原爆保有国があることについて、どう思いますか。

【大隅】実際問題は、生活に……、私はマジで124歳までやるつもりじゃけ、まるっきり狂うとかいうのは思うてない。毎日が楽しい。でもやっぱり、女房が死なずに。逆にそこまでになると、大好きな麻雀とか、大好きなお酒、大好きなたばこも控えざるを得んから、しかし、元気になりさえすりゃばいつでもいいじゃないかと。だけど、何においてもね、うまいんよね。生活の知恵なんじゃろうか、それも死ななかった生活です。

【折原】私は以前に、原爆投下後に防火水槽に飛び込んで固まった死体があると本で読んだことがあるんですが、それって実際に、ほんとうにあったんですか。

【大隅】あったんじゃろうね。とにかくね、食べるものはない、水も欲しかったのは間違いない、水。とにかく水も欲しい。今でも、西日本の災害にしても、あれと一緒。たまたま大雨が降り注げばいいけど。

【牧田】大隅さんが病気を発症したのは、放射能とかが原因なんですか。

【大隅】これはね、私は放射線の影響はあると思うとる。でも、母親に聞くと、小学校卒業するまでは近所のお医者さんにかかっちゃ、そうじゃないかって言われて、そういうことにしてる。自分が、原爆症、原爆手帳をもらえるから。それはみんなの、医療費は全額、国が見てくれるもんだから。それはむしろ隠れて、みんな大変医療費払わなきゃなんない。私は手帳を持っとるから医療費はただ。ただで国が面倒見てくれる。じゃけん、そういうのも厳しいにはあるよね、ちょっと、それはわからんね。

【鈴江】原爆が投下される前などに、空襲が来て、平和で争いがなくなるようにと願われたと思いますが、昔と今では、平和についての考え方は変わりましたか。

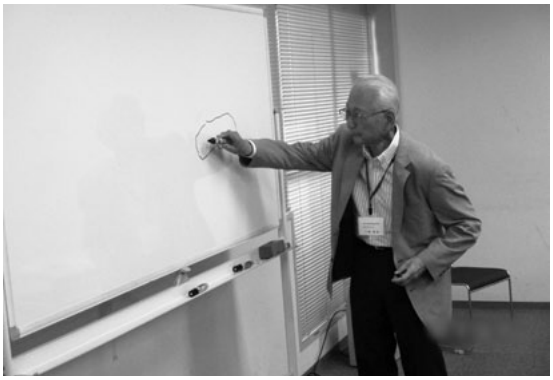
【大隅】今は、例えば、ピストルで相手にできんでしょう。日本、町内の友人、知人、広島市内からの学生同士のけんかも、今はね。何もわからんかったね。今もって原爆の成果……、原爆のためにこういう病気になったんやから、わからんこともないんじゃが、証拠がない。全く。だけど、真逆の道によるかもわかんし、よるんかもわからんし。で、薬も多分、飲まんでも、やめたらもたないし、これはね、わからんことだらけやね、人間の世界って。答えになりませんね。すみません。

【石】原爆投下後に、広島には植物がもうずっと育たないといわれていたと思うんですけど、今ではたくさん育っていて、植物が広島にまた咲き始めたのって、いつごろからですか。

【大隅】一説によると、草木も咲かないとか、あれもうそやね。少々のあれでは……、要するに、ぺんぺん草はすくすく育つように、生えていたんじゃないかね。

平成 31 年 8 月 5 日（日）
YMCA 国際文化センター

≪被爆者講師プロフィール≫



【氏名】大隅（おおすみ）　勝登（かつと）
【被爆時年齢】8 歳
【被爆時の状況】

1945（昭和 20 年）年大隅氏は小学 3 年生であった。朝、いつものように「いってきます !」と挨拶をして小学校へ向かう途中、工兵橋の近くにて被爆をする。その瞬間について大隅氏は「突然にピカピカと光ったら、ドッカーンという大きな音と悲鳴。」と語る。このときに落とされた原爆については「大きな焼夷爆弾だと思った」と語った。その後は母の指示に従い、山へ避難し、急場をしのぐ。

40 代半ばからガンを患い、回復と再発を繰り返す。現在は健康であり、健康業界の会社を設立している。

5．碑めぐり講話

日時：平成 30 年 8 月 7 日（火）
午前 9 時 00 分から 10 時 30 分
場所：平和記念公園内
講師：西岡（にしおか）　由紀夫（ゆきお） 氏

碑めぐり講話　ルートマップ　　**広島市ホームページより**

1、被爆したアオギリ

2、広島市立高等女学校原爆慰霊碑

3、平和の塔

4、材木町跡碑

5、広島平和都市記念碑

6、被爆した墓石（慈仙寺跡の墓石）

7、韓国人原爆犠牲者慰霊碑

8、原爆供養塔

9、原爆の子の像

10、祈りの像

６．成果報告

各中学校を代表して参加した１５名の派遣生は、広島で学んだこと、感じたことを各学校・地域に伝えるため、下記のとおり報告会や発表を行いました。

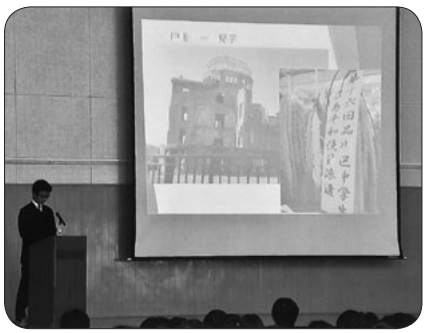
東海中学校　　小倉　丈

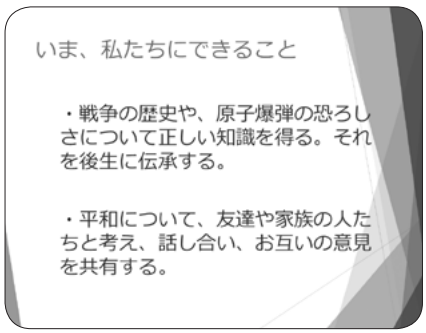
【日時・場所】平成３１年２月１８日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会　全校生徒・保護者・地域の方

【発表原稿抜粋】

友達や家族の人をはじめ、たくさんの人と話し合い、平和や、戦争をなくすための意見を共有していくことが大切だと思います。このスピーチが、戦争や平和について深く考えるきっかけになることを願っています。まずは今日、友達や家族の人と話し合ってみてください。





大崎中学校　　桜井　瑠海

【日時・場所】平成３０年１０月２７日　体育館

【方法・対象】学習報告会　全校生徒・保護者

【発表の内容】

広島で体験したことや、三日間のできごとを丁寧に説明し、その体験をして自分は何を思い、これからどうしていこうと思っているかを発表した。最後に自分がこれからも平和の大切さを伝えていくこと、そして聞いている皆さんにも平和について考えてもらいたいということを話した。

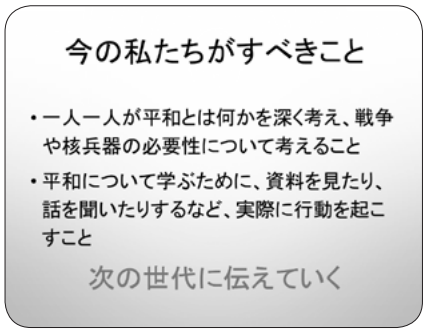
浜川中学校　　二上　翔

【日時・場所】平成 30 年 10 月 27 日　体育館

【方法・対象】学習発表会　全校生徒

【発表原稿抜粋】

「核兵器は、地球からなくすべきだと思いますか」という質問に“はい”と答えた人は９１人のうち７９人でした。ここから、核兵器の廃絶を多くの人が望んでいることがわかりました。一方、「日本が核の傘に守られているから」という理由でこの課題に真剣に向き合い、“いいえ”と答えた人もいました。こうした姿勢は、核兵器の廃絶に向けての第一歩だと思います。私は核兵器が地球からなくなったらそれを軸としている核の傘もなくなると思います。



鈴ヶ森中学校　　野村　春花

【日時・場所】　平成 30 年 10 月 27 日　体育館

【方法・対象】　文化祭　生徒・保護者・地域の方

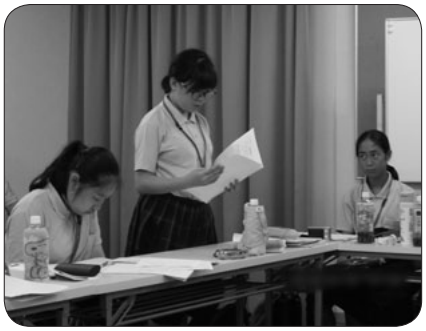
【発表の内容】

◎１９４５年８月６日　午前８時１５分　広島市
　被害の状況、原爆の威力、
　なぜ広島が選ばれたのか？

◎被爆者の講話
　原爆投下直後の様子
　講話の中で心に残った言葉
　講話を聞いて感じたこと、思ったこと

◎平和式典への参列
　参列を通じて心に残ったこと

◎平和資料館訪問
　展示物（写真　含）の説明など



冨士見台中学校　　田中　凜

【日時・場所】平成３０年１０月２６日　体育館

【方法・対象】文化祭　全生徒・保護者・地域の方等

【発表原稿抜粋】

原爆が落ちた過去があるから、今の日本がある。ということを、原爆を経験していない人が言うのは間違っている。経験していない人が、他人事のように言うのは、経験者からしてみれば苦である。「原爆反対、戦争反対」と言うことは簡単だが、原爆の恐ろしさは一言では表せない

荏原第一中学校　　金子　耀平

【日時・場所】平成３０年１２月１日　体育館

【方法・対象】報告会　全校生徒

【発表の内容】

・広島平和使節派遣体験談
・３グループによる戦争体験者３名から聞いた戦争体験談
・セルビア戦争体験談を受けてのそれぞれの感想
・第８学年平和学習有志一同による平和宣言
・同決意表明

荏原第五中学校　　牧田　沢英

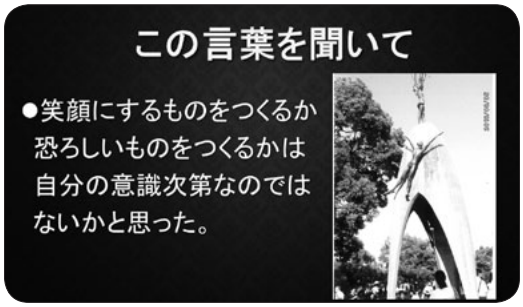
【日時・場所】平成３０年１０月２７日　アリーナ

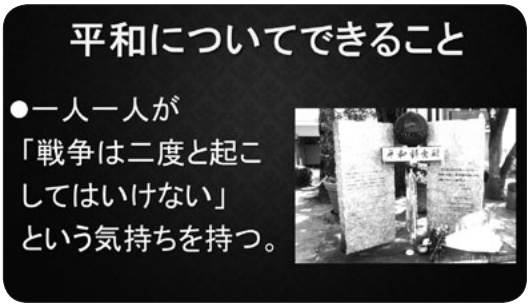
【方法・対象】報告会　全生徒・保護者・地域の方等

全生徒・保護者・地域の方等　約 500 名

【発表原稿抜粋】

世界中の一人一人が平和について考えるのは難しいことかもしれません。しかし、「戦争は二度と起こしてはいけない」という気持ちをそれぞれが持っただけでも平和につながります。私たちには、当たり前の日常を未来につなげる責任があります。一人一人の思いは集まれば大きな力になります。その思いを持つことは戦争を起こさないために必要なことだと考えます。





荏原第六中学校　　住田　彩葉

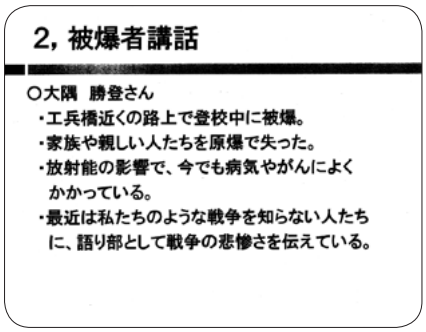
【日時・場所】平成３０年１０月２７日　体育館

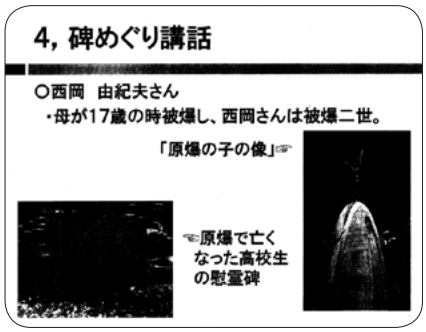
【方法・対象】学習成果発表会　全校生徒・教員・保護者

【発表の内容】①・平和とはどんなものかを考え、人によって考え方が違うことを知る。

・戦争を詳しく知り、戦争を二度とやってはいけないことを再確認する。

⇒平和への第一歩になる





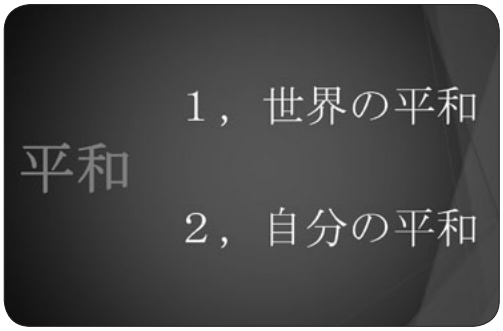
戸越台中学校　　清水　結莉

【日時・場所】平成３０年１０月２０日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会　全校生徒　保護者

【発表原稿抜粋】

このままいくと後世に伝える人がいなくなってしまいます。だから、私たちが被爆者の思いを伝えていく必要があります。（中略）73 年前、日本は多くの人々を失いました。今もなお苦しんでいる人がいます。だからこそ私たちに出来ることを探してやっていくべきだと思いました。「私たちは無力ではないのです。」



日野学園　　鈴木　茜

【日時・場所】平成３０年１０月２７日　体育館

【方法・対象】報告会　生徒５～９年生　保護者

【発表原稿抜粋】

3 日間の講話、資料館見学で学んだことから、相手の気持ちになって考え、相手の立場にたって想像することが「平和」であり、「平和」を築くことなのだと気付かされた。「平和」のために行動すれば必ず誰かに伝わる。無力だと思っていた私に勇気をくれた。「平和」とは、相手のことを思い、相手の立場になって考えること。そして、この「平和」の意味を多くの人に伝えていくことが、私たちが築ける平和なのだと、この 3 日間を通して強く感じた。先人たちが積み上げ、築きあげた平和な日本を次の世代、またその次の世代へと受け継いでいけるよう、現代に生きる自分たちのするべき役割をしっかりと考え行動するべきである。

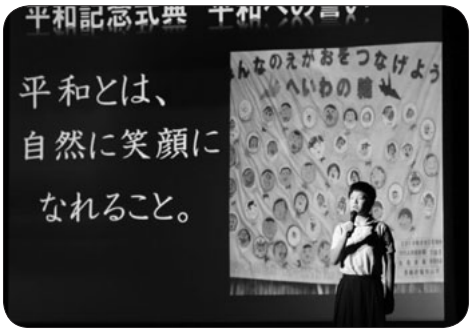
伊藤学園　　鈴江　翠花

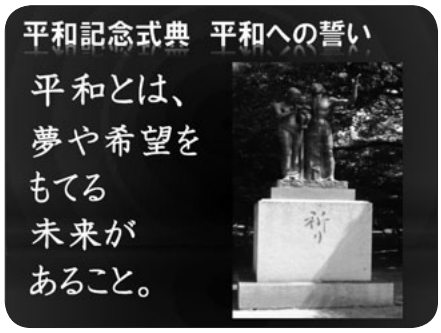
【日時・場所】平成３０年１０月２６日　アリーナ

【方法・対象】報告会（学芸発表会）　生徒５～９年生　保護者

【発表の内容】①聴覚教材（パワーポイント）を使用し、被爆者講話や平和記念式典への参列、平和記念資料館などの見学など、今回の派遣を通し学んできた内容について報告をした。

②まとめとして、「平和への誓い」について報告した。





八潮学園　　石　弥織

【日時・場所】平成３０年１０月２７日　体育館

【方法・対象】報告会　児童生徒・先生・保護者・地域の方

【発表原稿抜粋】

毎年、８月６日に原爆ドーム前を流れる元安川で平和を願って行われる灯篭流しでは、たくさんの人々が平和への祈りを込めて、灯篭を流しました。この灯篭流しは、原爆により、命を落としてしまった方々のご冥福を祈るとともに、広く世界への平和のメッセージを発信し、恒久平和を祈願しています。

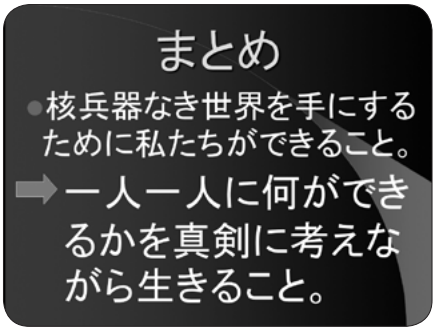
荏原平塚学園　　麻生　和勇斗

【日時・場所】平成３０年１０月２６日　アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会　児童・生徒・保護者

【発表原稿抜粋】

僕は広島に行き、想像を絶する被害があったことに驚き、復興した姿を見て、また驚きました。原爆を作り、投下したのは人間です。しかし長崎や広島で被爆し、復興させたのも人間なのです。これだけのすさまじい力を持っているのです。だからこそ、誤った方向に使わないよう、よく考えなくてはいけないと僕は思います。



品川学園　　折原　羽海

【日時・場所】平成３０年１０月２７日　アリーナ

【方法・対象】報告会　５～９年生・保護者

【発表原稿抜粋】

私は、広島平和使節派遣生として訪れてから改めて自分が幸せであることを感じました。
それは、被爆者講話でお話をしてくださった大隅さんが当時食料も大してなかったり、家族がバラバラだったり、学校にも通えなかったりと教えてくださったからです。好きな物、美味しい物、温かい物が食べれたり、温かいお風呂に入れたり、ベッドで寝れたり、さりげない日常ですが、幸せなんだなと思いました。

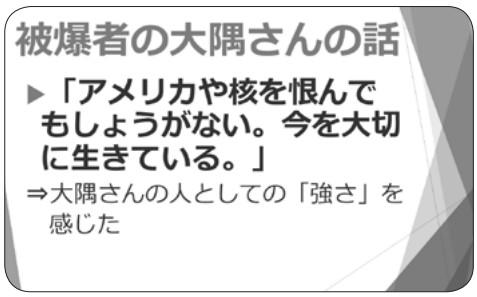
豊葉の杜学園　　山下　悠眞

【日時・場所】平成３０年１０月２７日　アリーナ

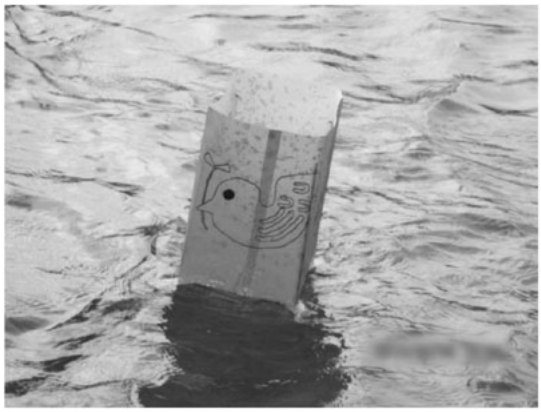
【方法・対象】学習成果発表会　５～９年生・保護者

【発表原稿抜粋】

私は戦争をなくすことで核もなくなると思っています。戦争がなければ核を持ったり、使ったりする必要がありません。戦争は利益を生むことはありません。たくさんの命が失われることはもちろん、それによって悲しむ人、祖国が戦場となって難民になって逃げる人などが多くなります。私は、みなさんにもどうしたら戦争がなくなるか考えてもらい、その先に核のない世界が実現できると思います。私は広島を訪れ、たくさんのことを学びました。このことは、いつまでも忘れず、周りの人に伝えていきたい思います。



＜８月６日（２日目）「灯ろう流し」派遣生が作製した灯ろう＞



第２部
青少年長崎平和使節派遣

平和祈念像の前で

●派遣生（敬称略）

森川　里菜　（中学生）　　島根　みなみ（中学生）
木村　彩花　（高校生）　　安戸　乃彩（高校生）
酒井　日向　（中学生）

●引率者

総務部総務課　豊田　敦子、田村　拓也

1．行動日程表

第 16 回青少年長崎平和使節派遣　平成 30 年 8 月 8 日～10 日（2 泊 3 日）

8 月 8 日（水）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：30	集合 JR・京急で羽田空港へ	JR 大井町駅中央口
8：15	羽田空港発	羽田空港
10：05	長崎空港着 リムジンバスで長崎市内へ	長崎空港 大波止バス停
11：30	ホテル着	エスペリアホテル長崎
12：00 ～	昼食	平和公園近辺
13：00 ～ (13：55)	★青少年ピースフォーラム受付	平和会館ホール
14：00 ～ 15：15	★開会行事（被爆体験講話など）	平和会館ホール
15：25 ～ 17：25	★参加型平和学習 （被爆建造物等のフィールドワーク）	原爆資料館周辺
17：45 ～ 18：15	「平和の灯」事業見学	平和公園入口～平和の泉周辺
19：00 ～	夕食・ホテル着	長崎市内・エスペリアホテル長崎
22：00	就寝	

8 月 9 日（木）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：00	起床	
7：30	朝食	ホテル内レストラン
8：45	ホテル出発	エスペリアホテル長崎
9：15	平和公園着	平和公園
9：30 ～（9：45）	平和祈念式典開場・受付	平和公園
10：40 ～ 11：45	平和祈念式典参列（長崎市実施）	平和公園・平和祈念像前
12：00 ～	昼食	長崎ブリックホール国際会議場周辺
13：00 ～ (13：25)	★平和学習受付	長崎ブリックホール国際会議場
13：30 ～ 15：30	★平和学習	長崎ブリックホール国際会議場
15：30 ～ 17：30	自主研修	長崎市内
17：30 ～	原爆資料館見学	原爆資料館他
19：00 ～	夕食・ホテル着	長崎市内・エスペリアホテル長崎
22：00	就寝	

8 月 10 日（金）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：00	起床	
7：30	朝食	ホテル内レストラン
9：00	ホテル出発	エスペリアホテル長崎
9：00 ～ 14：30	自主研修・市内見学（昼食）	長崎市内
14：30	集合 リムジンバスで長崎空港へ	大波止バス停
17：05	長崎空港発	長崎空港
18：55	羽田空港着 京急・JR で大井町駅へ	羽田空港
19：40	解散	JR 大井町駅中央口

★は青少年ピースフォーラム事業（長崎市が実施）

「青少年ピースフォーラム」とは？

毎年８月９日の平和祈念式典にあわせて、長崎市では、「青少年ピースフォーラム」を平成５年度から開催しています。「青少年ピースフォーラム」は、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として実施しています。

このフォーラムでは、大学生や高校生などで構成される長崎市の「青少年ピースボランティア」が中心となり、平和学習の進行やフィールドワークの案内などを行っています。

2018 年は「品川区青少年長崎平和使節」をはじめ、全国から 36 団体、401 名もの青少年が参加し、ピースボランティアなどと交流を深めました。

<table>
<tr><th>日</th><th>時</th><th colspan="2">内　　容　＜場　所＞</th></tr>
<tr><td rowspan="3">1日目
8／8
（水）</td><td>14：00
～15:15</td><td colspan="2">開会行事（被爆体験講話など）＜平和会館ホール＞</td></tr>
<tr><td rowspan="2">15:25
～17:25</td><td colspan="2">【コース別の平和学習】長崎原爆の実相について学びます。</td></tr>
<tr><td>Aコース
平和学習
＜平和会館ホール＞
こじんまりフィールドワーク（屋外）
＜原爆資料館周辺＞</td><td>Bコース
コース別被爆建造物等のフィールドワーク（屋外）
＜原爆資料館周辺＞</td></tr>
<tr><td></td><td>18:00
～19:30</td><td colspan="2">交流会（希望者）
＜長崎新聞文化ホール＞</td></tr>
<tr><td rowspan="3">2日目
8／9
（木）</td><td>午 前</td><td colspan="2">長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列＜平和公園ほか＞
もしくは長崎市内学校での平和集会への参加</td></tr>
<tr><td rowspan="2">13:30
～15:30</td><td colspan="2">【コース別の平和学習】平和について考えます。</td></tr>
<tr><td>≪Aコース≫
平和学習
＜平和会館ホール＞</td><td>≪Bコース≫
平和学習
<長崎ブリックホール国際会議場></td></tr>
</table>

事前打ち合わせ会

派遣生が平和使節派遣事業の趣旨を理解し、それぞれが目的を持って長崎への派遣に臨めるよう、事前打ち合わせ会を２回実施しました。

打ち合わせ会では、参加者の自己紹介や参加への動機、非核平和都市品川宣言事業および青少年長崎平和使節派遣の目的についての説明、自主研修の検討等を行いました。

また、平和への願いを込めて長崎へ持って行く千羽鶴を全員で作成しました。

〈第１回〉６月２１日（木）午後６時～

・自己紹介
・参加動機の発表
・「非核平和都市品川宣言」事業の説明
・「青少年長崎平和使節派遣」の目的を説明

〈第２回〉７月２５日（水）午後６時～

・「平和の折り鶴」受領
・ピースフォーラム事業について説明
・自主研修計画表の提出
・スケジュールの最終確認
・自主研修の検討
・派遣報告書類の説明

事後報告会

８月 29 日（水）　午後６時～

今回の平和使節派遣を通じて印象に残ったこと、学んだことなどを話し合いました。

また、来年度の事業運営に生かすため、感想・意見を発表してもらいました。

・派遣の感想、反省発表
・成果報告書について
・派遣修了証書および青少年ピースフォーラム修了証書授与

2．長崎での主な活動

（1）青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）

〈日　時〉　8月8日（水）　14：00～15：15
〈場　所〉　平和会館ホール
〈内　容〉　開会式は青少年ピースボランティアが司会をつとめました。被爆体験講話では、４歳８ヵ月のときに爆心地より 1.5km の自宅近くの畑で被爆、両手、両足、腹を火傷し、足は３回の手術を受けた小峰秀孝さんのお話を聴講しました。

被爆体験講話
講師の小峰秀孝さん

青少年ピースボランティアによる合唱

＜酒井　日向＞
ずっとアメリカを憎み続けてきたのが、アメリカに行って被爆の講話をしたときに、アメリカの人達に泣いて「許してください」と言われ、アメリカの人々が悪いわけでなく「戦争」が悪いんだと改めて感じたとおっしゃっていたのが印象に残りました。

＜木村　彩花＞
小峰さんが被爆によって負った火傷のせいで、学校でいじめられたり、他の人から拒絶されたりということをご本人の口から聞かせていただき、人一人の人生の重みをずしりと感じました。数えきれないような苦しみを経験しながらも、私達のために自分をさらけ出してお話を聞かせて下さっている小峰さんに、意志の強さを感じました。

（2）被爆建造物等のフィールドワーク

〈日　時〉　8月8日（水）　15：25～17：25
〈場　所〉　原爆資料館周辺（山王神社コース）
〈内　容〉　長崎医科大学や山王神社を青少年ピースボランティアと一緒に見学し、被爆の実相を学習しました。

長崎医科大学

山王神社（二の鳥居）

山王神社（被爆クスノキ）

平和公園祈りのゾーン　爆心地公園
（被爆当時の地層）

＜森川　里菜＞半分しか建っていない鳥居を見て、爆風の強さや熱風の怖さがわかりました。73年前のたった一瞬の出来事で、鳥居が半分になったり、旧正門が左に16㎝も傾いてしまったりしていて、一番印象に残りました。

＜島根　みなみ＞一番印象に残ったのは、旧正門門柱です。とても重そうな柱が土台から9㎝もずれていて、驚きました。

（3）平和祈念式典

〈日　時〉　8月9日（木）　10：40～11：45
〈場　所〉　平和公園内平和祈念像前広場
〈内　容〉　被爆73周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆が投下された11時2分には、一斉に黙とうを捧げました。

平和の泉で千羽鶴を捧げる

平和公園平和祈念像

11時2分黙とうを捧げる

式典に参列する派遣生たち

＜安戸　乃彩＞
参加できたことを誇りに思いました。合唱や鶴の数からも、たくさんの人の平和への願いがうかがえ、鶴の数に衝撃を受けました。私たちが作ってきた千羽鶴がちっぽけなものに感じましたが、その分たくさんの団体が寄付していると考えられ感動しました。世界や日本中からたくさんの首脳が集まっていましたが、その他にも私たちのようにたくさんの子どももよんで参加するべきだと思います。

＜島根　みなみ＞
テレビでは伝わらない雰囲気を感じました。そして、平和式典はいつまでも続けていかなければならないことだと思いました。

（4）平和学習（意見交換）

〈日　時〉　8月9日（木）　13：30～15：30
〈場　所〉　長崎ブリックホール国際会議場
〈内　容〉　レクリエーション後、グループごとに平和な世界にするために何ができるかを考え、意見交換を行い、ピースフォーラムで学び伝えたいことをモザイクアートにしました。

グループごとの意見交換

グループで協力しモザイクアートを作る

完成したモザイクアート

＜森川　里菜＞
色々な人の意見があり、どれも共感できました。今自分が感じる幸せを、昔の原爆や戦争のときにできたのかを考えてみたりすると、とても心が苦しくなりました。今、この時、喋ることができるだけでも幸せなんだと思いました。

＜酒井　日向＞
もしも世界が～だったらという題名で話し合った時に、他の参加者の「もしも世界中の人達が知り合いだったら」という意見を聞いて、とても素晴らしい意見だと思いました。

（5）長崎原爆資料館見学

〈日　時〉　8月9日（木）　17：30～18：30
〈場　所〉　長崎原爆資料館
〈内　容〉　被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示物を見学し、「当時の被害状況」や「核実験の放射能」などを学ぶことで、派遣生一人ひとりが戦争の悲惨さを感じ取り、平和に対する意識を改めて強く持ちました。

館内の資料等を見学する派遣生たち

＜木村　彩花＞
何よりも衝撃だったのは、当時の状況を写した白黒写真と、被爆した壁やガラスといった物でした。あまりにも生々しく、正直言えば、目を覆いたくなる光景でした。壁や瓦の表面に沸騰したあとが泡立っているのを見たことが印象に残っています。ここは誰もが一度は自分の目で見に来るべき場所だと思いました。

＜安戸　乃彩＞
ガイドを聞きながらまわることで、より理解が深まりました。爆弾の模型を実際に見られ、またこのプログラムであまり学ぶことのなかった、外国人の被爆まで学ぶことができました。講話などで聞けたことの現物が実際にあったり、詳しい説明がされてあったり、被爆のことについて広く深く知ることができました。

（6）自主研修・市内見学

〈日　時〉　8月9日（木）　16：00～17：30
　　8月10日（金）　9：00～14：30
〈場　所〉　長崎市内各所
〈内　容〉　あらかじめ計画を立て、ピースフォーラムでは行けなかった被爆関連施設のほか、市内の名所などを巡り、長崎の地理・歴史についても学びました。

山里小学校　防空壕跡

永井隆記念館

出島

グラバー園

長崎孔子廟　中国歴代博物館

長崎新地中華街

＜森川　里菜＞

たくさんの人が平和の灯をしていて、みんな平和を願っているのだと改めて確認することができ良かったです。それぞれデザインがたくさんあって、見ていて心が温まりました。(8 日)

山里小学校に幼い子が書いた作文のようなものがあり、それを見ながら想像すると本当に心が痛くなりました。(9 日)

長崎は、昔、原爆を受けたとは思えないほど充実していて、グラバー園から見た景色がすごくきれいでした。(10 日)

＜島根　みなみ＞

たくさんの人が平和の灯事業に参加していて、これからもっともっと平和について考える人が増えたらよいなと思いました。(8 日)

永井隆記念館が一番印象に残っています。永井隆さんは平和な世界をつくるためにたくさんの本を出していて、すごいと思いました。(9 日)

長崎市内には、戦争や原爆について考えることのできる建物などが多く残っていて驚きました。(10 日)

＜木村　彩花＞

原爆によって苦しめられた人々と、これからの自分たちの世界の平和と安心を祈って、キャンドルにメッセージを書かせていただきました。公園内に人々の思いを抱えたキャンドルがたくさんあって、この思いが世界中の人々に届くように願いました。(8 日)

一番印象的だったのは大浦天主堂です。今まであまり知らなかった潜伏キリシタンの暮らしやその成り立ちを知ることができました。その他にも、出島などで外国文化と日本文化の混ざった不思議な空間を楽しむことができました。(10 日)

＜安戸　乃彩＞

山里小学校には当時のものがたくさん置いてあり、とても興味深かったです。当時の生徒の日記は悲惨さがよく伝わってきました。また、外で普通に子どもが遊んでいる姿を見て、復興したことを感じるとともに、今のこの状況を突如として二度と壊したくないと思いました。昔、この状況が一瞬にして突然壊されたかと思うと、こわくなりました。(9 日)

出島やグラバー園は特に、長崎の立地による外国との交流を知ることができてよかったです。今まで習ったことがある場所に行けて、楽しく長崎の地理歴史を学ぶことができました。(10 日)

＜酒井　日向＞

平和の灯では、平和は明るい感じの色だと思ったので、オレンジ色を入れてみました。平和を作り上げていくのは人間と人間の間に生まれる愛という感情だと思いました。(8 日)

防空壕が印象に残りました。あんなに小さい防空壕の中で、どれだけの人達が助かって、また死んでいったのだろうと考えました。(9 日)

出島では、昔の頃の出島の様子を知ることができました。グラバー園では、恋がかなうといわれていたハートストーンを 2 つ見つけることができました。(１０日)

3. 成果報告書

平和とは

森川　里菜

73 年前、日本は太平洋戦争中でアメリカやイギリス、中国などの連合軍と戦っていた。そんななか、8 月 9 日午前 11 時 2 分、長崎に原爆が落とされたのだ。激しい爆風や熱線、放射線の影響により、当時住んでいた長崎市民約 24 万人中、犠牲者・負傷者を含めると 14 万 8,793 人に被害が及んだ。もし、原爆が落とされた時生きていても、後に放射線ですぐに亡くなってしまったり、体、心にひどい傷を負い、全ての人の人生を狂わせたとも言えるであろう、私はそんなことをつい最近まで知らないでいた。もちろん、知らないとはいっても、社会の授業で習ってはいた。だが、被害の大きさや被爆者の今後の人生までは知らなかった。こんな大事なことを学ばせてくれたのは長崎平和使節派遣だ。文面だけで知るのではなく、実際にあった場所に行き、触れて、感じて、話を聞くと、思っていたことよりも何倍もひどかった。

この長崎平和使節派遣の平和とは何か、そして今現在、語り手として活動している被爆者の方々の現状、今後について、伝えていこうと思う。

平和とは何か。これは正解がない問いだと私は思う。まず、インターネットで調べてみた。すると、戦いや争いがなくおだやかな状態と記されていた。だが、私は互いが互いを思い合う世界だと思う。このようにたくさんの考え方が世の中にはある。だから、私は自分の考えを訴えるのではなく、みんなそれぞれの心に、平和とは、という問いを立ててほしい。そして、答えを見つけ、自分なりに貫いてほしい、そう思った。そうすれば、意見の対立はあるかもしれないが、私たちの、私たちなりの平和な世界になると思う。

そして、今現在、語り手として活動してくれている方々が年々減少している件についてだ。あの日から 73 年たった今、語り手の方々はご高齢になりつつある。だが、私はこの語り手さんの文化を壊してはいけないと思った。なぜなら、私は語り手さんの話を聞いてとても感動したからだ。初めて話を聞いて、実際に被害を受けた人からの声や話は、文章で見て読んだりするのとは全く違った。どれだけ辛いかやその時の状況などが本当によくわかり、実際に傷ついた体を見たりして感じた方が大きいと思う。ピースフォーラムの時の語り手の方は、私は最初、歩き方が少し不自由そうに見えただけで、他は何の被害も受けてないように見えた。だが、その人の話を聞いていると、足がひどく、お腹も火傷しているという。このように外から見えないだけで、実際の被害は、被害を受けた人にしかわからないから、語り手の文化を途絶えさせてはいけないと思う。しかし、時が経つのは仕方のないことだ。

では、どうすれば語り手の人の思いを後世にまで伝え続けられるか。語り手の方だけでなく、亡くなってしまった被害者の方々、家族の思い、戦争、核兵器の悲惨さを伝えて行くことが私たちの役目だと思う。私はまず、身近な人に伝えようと思い、長崎から帰ってすぐ、母親に今回の派遣で学んだこと、感じたことを伝えた。すると、初めて知ったことも多かったらしく、平和について改めて考えてくれた。これは私の

母親だけではないと思う。父親、友達、親せき、全ての人に当てはまることだと思う。だからもっと多くの人に伝え、情報社会の今なら、海外にまで伝わることだってあると思う。今後、私は今回の経験で得たことを周りに広め、被害にあった方々の思いと、核兵器、平和について、更に深めていきたい。

最後になってしまいましたが、長崎の原爆についてとてもたくさんのことを知ることができて本当に良かったです。ありがとうございました。そして、世界が平和になりますように。

長崎平和使節派遣報告書

島根　みなみ

広島に原爆が投下されてから３日後の1945年８月９日午前11時２分。このとき、史上２回目の原爆が、長崎に投下されました。原爆の投下によって、約７万４千人もの尊い命がうばわれました。

原爆が悲惨なことだとは知っていました。でも、具体的に当時の長崎がどうなってしまったのか、あまり詳しくは知らなかったので、知りたいと思い、今回の長崎平和使節派遣に参加させていただきました。

１日目に行われた、被爆体験講話では、原爆がどれだけ悲惨なことか分かりました。原爆は、とてつもないエネルギーをもっており、沢山の罪のない命を一瞬にしてうばいました。助かった人々も後遺症や被爆者という差別に苦しんでいました。後遺症で苦しまれている人がいることは、知っていましたが、差別を受けている人がいることは、知りませんでした。原爆は、人の人生を一瞬にして変えてしまう、恐ろしいものだと改めて思いました。

そのあと、被爆した建物などを見学しました。

まず、一本鳥居を見学しました。この鳥居は、爆風によって左側が飛ばされてしまった鳥居です。被害はそれだけでなく、鳥居の表面をとかしました。熱線を浴びた側は、浴びていない方と比較すると、石特有のザラザラ感は、なくなってしまいました。

次に、被爆したクスノキを見学しました。被爆した木ときいていたので、小さくてヒョロっとしている木だと思っていました。でも、実際は、とても大きな木でした。クスノキは被爆をして、もうだめかもしれないと言われていました。でも、徐々に回復していき、今では高さ21ｍ、幹回り８ｍ58㎝もの、立派な木に成長しました。私はクスノキのパワーに感動しました。

２日目には、平和祈念式典に参列させていただきました。テレビでは味わえなかった、式典の雰囲気を感じることが出来ました。この式典には、小学生から年配の方まで、たくさんの方が参列されていました。また、海外の方々も参列されていました。この式典は、世界の人々が、世界について考える大切な機会になると思うので、毎年欠かさずに行うことが大事だと思いました。

平和祈念式典の後には、平和使節派遣で集まった中高生を対象に、平和についての意見交換会が開かれました。みんな、「平和な世界を作るためには、自分に何が出来るか」というテーマで話し合いました。私は、一人一人が原爆について知ることだと思いましたが、他の人は、たくさんの人に原爆の恐ろしさを広めるなど、同じテーマだけれど、出てきた意見はさまざまでした。

ここで、みなさんに質問です。

平和な世界を作るために、私たちに何が出来るでしょうか。

私は、一人一人が、原爆の悲惨さを知ることだと思います。そして、原爆の悲惨さを知れば、二度と原爆をしてはならないと考えるはずです。そう考える人がたくさんいれば、世界平和につながると、私は考えます。

「ナガサキ」を見て

木村　彩花

この研修に参加したきっかけは、以前学校で広島の原爆について学習をしたことがあり、原爆についてもっと知らなければならないと思ったからです。本を読むことはもちろん大事ですが、やはり生で学ぶことで得られるものは大きいと思ったので、参加させていただきました。

一日目は被爆された方のお話を伺いました。この方は、被爆された後のご自分の人生について語ってくださいました。被爆によって足が腫れ上がったため、まっすぐに歩けず、痛みで学校へ通う道のりが辛かったとおっしゃっていました。特に雪の日は、痛みと寒さで足の感覚がなくなってしまい、進んでは転ぶことを繰り返していたそうです。通ってきた道の雪はとけ、歩いたあとには血が点々と落ちていたというのを伺って、幼い子供がこのようなむごい仕打ちを受けなければならなかったということがショックでした。また、学校についても、ケロイド状になった火傷の跡や足を引きずって歩く歩き方についてからかわれるなど、自分ではどうにも出来ないことでいじめられていたというのは、聴いていて締め付けられる気持ちになりました。大人になってからも、被爆者だということや外見のことで差別を受けたそうで、死にたいと思うことが何度もあったけれど、他の被爆された方が線路や崖で自殺するのを何度も見ているので、鳥肌がたったとおっしゃっていました。私には、あまり人の生死についてよく考える機会がなかったので、心にずしりと響きました。被爆された方の人生をご本人の口から直接聴くというのは重い経験でしたが、それだけ大切なものなので、一生このお話を大事にして、次の世代へ伝えていこうと強く思いました。

自主研修で行った山里小学校原爆資料館や長崎市永井隆記念館で読んだ体験談も、痛々しいものでした。暗くて蒸し暑い防空壕に一目散に入り、出てくるとそこは一面焼け野原、家族も重傷を負って死にそうだという状況に小学生がさらされているというのは、現在の日本では考えられないことです。日頃から安心して生きられる世の中ではなかったことが、展示品からも感じられました。一瞬にして大事な人を奪い、多くの人を傷つける原爆がこの世にあってはならないと思いました。

青少年ピースボランティアの方に案内していただいたフィールドワークでは、長崎医科大学の旧正門門柱を見学しました。写真で見たときにはよく分かりませんでしたが、現場で見ると、この太い石柱が風でこんなに動かされるのかと原爆の威力をそら恐ろしく感じました。二日目に行った長崎原爆資料館では、瓦の表面が沸騰して泡立った状態で冷え固まったというのを見て、沸騰という言葉に目を疑いました。私の予想をはるかに超えたもので、言葉を失いました。

今回の研修に参加させていただいて、最

も衝撃を受けたものの一つは、長崎原爆資料館に展示されていた、当時の長崎市の写真でした。あの写真の光景が現実として自分の周りの全方向に広がっていて、それがほんの少し前まではいつもの故郷の姿をしていたということ、人間が自分の知っている形では存在し得ないということ、点在する遺体の中に自分の家族や友人がいるかもしれないということ、自分も死ぬかもしれないということ。このような状況に置かれたときの心境を思うと、胸を押さえずにはいられませんでした。それに加え、2018年の８月９日でさえ暑さのために外に長時間いるのは辛かったのですから、73年前の原爆によるひどい火傷と照りつける太陽による苦しみは、想像を絶するものだったでしょう。写真は全て白黒でしたが、当時の人々の目には鮮明な映像として焼き付けられていたのです。私たちはこのことから目をそらすことができるし、見ない方が楽ではあるかもしれませんが、これは逃れようのない現実に起こったことです。人間として、真摯に向き合わねばならないと思いました。

この研修を通して私が感じたことは、一日目にお話をしてくださった被爆者の方、自主研修で行った記念館の永井隆博士、二日目の平和祈念式典で演説をなさった方など、原爆を経験した方々がみな未来に平和という希望を託していることです。この期待に応えられるように、また私たち自身のためにも、平和活動をしたいと思いました。

この世界は、自分の住む世界です。戦争や核によって、自分の住む世界が荒らされてもいいのか。戦争と平和について、正しい情報を伝え、いろいろな視点から考え、個人がそれぞれ明確な意志を持ってこの問題に向き合えるように最善を尽くそうと思いました。

最後になりましたが、このような人生において重要な体験をさせてくださった方々に深く感謝しております。本当にありがとうございました。

世界平和への野望

安戸　乃彩

あの日から、73年。あの戦争は日本にたくさんのことを教えてくれた。それによって日本には、広く強く非核化への想いが根付いてきた。日本中のほとんどの人が平和を願い、戦争は悪だと思っているだろう。しかし、それを形にしたことがある人はどれだけいるだろうか。例えば平和祈念式典のテレビ放送を見たことがある子どもはどのくらいいるだろうか。私は今年初めて、広島のそれを見た。私は今の社会には、平和への想いは根付いていると思うが、それらを形にする機会は欠如していると思う。

また、戦争から73年経った今、私たちは戦争を経験した世代から直接それを受け継ぐ最後の世代となっている。だからこそ、私達は語り継いだことを私達の次の世代につないでいくという使命がある。

私は、平和への思いを形にする機会を得て、それを同世代や次世代に語り継いで行くためにこの派遣プログラムに参加した。

私が長崎に来て初めに気づいたことは、至る所に折り鶴があるということだ。私達も長崎に行くに向けて５人で協力して千羽鶴を折り、納めた。しかし、そこに甚だしい数の千羽鶴があった。私達５人の力の小ささを感じるとともに、たくさんの人が平和の願いを込めて折り鶴を作ったのだと感じ、とても感動した。

今回の派遣プログラムでは、平和祈念式典、ピースフォーラムが最も大きなイベントとしてあったことだろう。それらでは、平和の大切さ、戦争が起きたらどれだけの幸せが失われるか、非核化への想いなど忘れかけていたものを再確認することができた。想いを形にする機会がなければいつか忘れてしまう。長崎の子どもと東京の子どもの意識の差を感じた。どちらの子どもも、今後日本の未来を背負って行くことに変わりはない。だから、平和への想いを日本中の子どもに根付かせるために、戦地でないところで生まれた子どもにも平和や戦争の悲惨さについて、再認識させることが必要だと思った。日本に、平和教育の機会を増やさなければならない。この夏私は長崎でたくさんの場所に行き、インターネットでは絶対に得て学ぶことのできない primary source から戦争と平和を学ぶ貴重な機会をいただいた。まずは、私が今回 primary source から教わったことを、新鮮なまま周りに広めていきたい。

また私は平和教育の機会を増やし、戦争と平和について再認識させるのは、日本だけにとどめるべきではないと思う。はじめての被爆国であるという立場から、たくさんのことを他国に伝えていくべきだと思う。私はアメリカの子どもにそれを伝えていきたい。アメリカが日本に原爆を落とした理由は、アメリカが戦後の米ソの対立を有利にするため、北海道はソ連に占領されるのを防ぐため、戦争を早く終わらせるためという理由があった。日本人でそれを知っている人はどれだけいるだろうか。アメリカにはアメリカの立場があり、日本には日本の立場がある。しかし、アメリカでは広島や長崎に関しての第一次資料、またそこで被害を受けた人や、現在そこに住んでいる人の考えを知る機会がない。だから、私はそれらをアメリカの子どもたちに伝えていきたい。私の学校では、それをフロリダの子どもに伝えるプログラムがある。それに向けて私は今、学校の授業で、各国が第二次世界大戦についてどう考えているかが書かれた文章を英語でそのまま読み、他国の考えも学んでいる。それに加え、私は 10 月に広島に行く。長崎で学んだことと広島でこれから学ぶこと、また授業で学んだ他国の考え、どれも学ぶことでより戦争や平和への理解を深め、フロリダの子どもたちにそれを伝えていきたい。これからのこの世界を担って行くのは世界の子どもだ。日本の子どもだけではない。だから戦争と平和についての理解は、日本だけにとどまってはならない。

世界に平和への想いを根付かせたい。それが私の願いだ。長崎に行ったことは、私のこの大きな野望の第 1 歩目となった。長崎でたくさんの primary source から戦争と平和を学べたこと、本当に貴重な経験となった。長崎派遣プログラムの参加を決めてよかったと思うのと同時に、この経験を無駄にはできないと責任を感じる今日この頃である。

核のない世界へ

酒井　日向

今回で二度目の長崎派遣となりましたが、私が再び長崎派遣に応募した理由は長崎をより深く知り、平和への思いを新たにするためです。人間は忘れゆく生き物です。毎日の楽しい生活の中で大切なことでもふと忘れてしまうことがあります。それでも忘れてはいけないことがあるのです。それを

確かめるためにもまた長崎に訪れなければならないと考えていました。

二回目ということもあり、前回より落ち着いて臨めたのですが、今年も平和祈念式典は厳粛な雰囲気に包まれていました。そして黙とうの１分間は永遠に続くような、長く、神聖な時間に感じました。ここに立ち、その悲劇に思いをはせたとき誰しもが特別な感情にとらわれるのです。そして平和祈念式典の中で一番心に残ったことは国際連合事務総長のアントニオ・グテーレス氏がいらしたことです。教科書でしか見たことのない方に会えるとは夢にも思わなかったので、少し不謹慎ですがとても感動してしまいました。残念ながら事務総長の演説は英語だったので内容についてその時は理解できませんでした。東京に帰ってきてから演説の内容について調べてみました。

グテーレス氏はポルトガル人で長崎とは政治的、文化的、宗教的に縁の深い国であることを述べていました。そして長い歴史を持つ魅力的な国際都市であることだけではなく、原爆により多大な犠牲者を出した街であるにも関わらず、強さと希望の光を失わない不屈の精神の象徴であると言っております。私もその通りだと思います。原爆は大勢の犠牲者や建物を壊せても心の中までは打ち砕くことはできないのです。そしてその困難から立ち上がった人々が現在世界中で平和と軍縮の指導者として平和な世界への礎となっているのです。これ以上新たな被害者を出さないという強いメッセージに心打たれました。

その一方で 73 年たった今も核戦争の恐怖のもとに私たちは生きていて、核保有国は軍備を拡大し、一向に核兵器の廃絶は進んでないように思われます。今回調べてわかったことですが、国連が主導的役割を担えていないのは核兵器を所持している上に拒否権を持つ国及び日本などの影響力のある国からは事務総長は選ばれないということです。つまり、リーダーシップを取れる国は軍縮に対して反対を表明しやすいのです。大国と言われる国々から選ばれたリーダーが持ち回りで役割を担うのであれば安易に反対出来ず、より平和な世界へと繋がると思うのです。もちろん小国の意見が蔑ろにされてはいけないので現行の制度にも良い部分はあると思います。しかし、今こそ核兵器廃絶という目標に向けては新しい方法、体制が必要とされているのではないでしょうか。

最後に原爆資料館を伺った時に以前一カ所だけ怖くて見ることが出来ない場所がありました。その時は見ずに逃げてしまいましたが、今回は二回目ということで勇気を出して見ることが出来ました。ふつうに見ると少し焦げた壁としか見れないようなものが、よくよく見てみると焦げているところが葉の茎や、葉の一枚一枚にくっきりときれいに残っていました。そして私はこのような「影」に見覚えがあります。それは人間の「影」です。その写真を前に泣いている５歳ぐらいの子供を見ました。人は言いようがない恐怖に理解を超えておびえるしかないのだと思いました。グテーレス氏が演説の最後に「私たちみんなで、この長崎を核兵器による惨害で苦しんだ地球最後の場所にするよう決意しましょう。」と言っていました。私たちの絶え間ない努力の先にその未来があると思いました。そしてこれからも私はその努力を続けていく決心を新たにすることができた今回の研修でした。

4. 派遣をふり返って（感想）

森川　里菜

戦争の辛さ、怖さがどこに行っても感じられました。二度と消えることはないのだろう。

だからこそ、悲惨さを伝え、今、平和なことはとてもありがたいということを伝えていかなければと改めて思いました。

実際に被爆した建物を見て、とても迫力を感じ、原爆の恐ろしさを感じました。

今回の派遣で見たもの、感じたものを周りの人へ伝え、戦争についてもっともっと知ることが大切だと思いました。

島根　みなみ

木村　彩花

今まで原爆については漠然とした知識しかありませんでしたが、実地で研修を受けたことで、原爆がおよぼした影響を身に迫って感じました。

私達は戦争を経験したことがないので、被爆された方々やそのご家族の気持ちを完全に理解することはできないかもしれませんが、一人ひとりが「もし自分だったら」と想像し、相手の気持ちを理解する努力をするべきだと思いました。

原爆が落とされたとき、被爆者への差別が起こってしまうのも問題で、それは差別をしないということが社会に根付いていないからだと思いました。だからこそ、このプログラムなどで、多くの人に平和への意識を根付かせることが重要だと感じました。

また長崎にはあらゆるところに鶴があって、たくさんの人の平和を願う気持ちが伝わってきました。現地の人の平和への思いはやはり違うと思いました。現地でしかわからないことだと思います。

安戸　乃彩

酒井　日向

私が今回応募した理由が「私の知らない長崎を色々な場面で知りに行く！」というような理由でした。

原爆資料館では去年、私が中２の時に見られなかった場所や展示物を見られましたし、出島やグラバー園、孔子廟では長崎の歴史を知ることができました。

第３部　資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA　PEACE　MEMORIAL　CEREMONY

平成30年（2018年）8月6日

August 6, 2018

広　島　市

The City of Hiroshima

式 次 第

Program

開　　式	8：00	**Opening**
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8：00	**Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims** Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式　　辞 広島市議会議長	8：03	**Address** Chairperson of the Hiroshima City Council
献　　花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来　賓	8：08	**Dedication of Flowers** Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8：15	**Silent Prayer and Peace Bell**
平和宣言 広島市長	8：16	**Peace Declaration** Mayor of Hiroshima
放　　鳩		**Release of Doves**
平和への誓い こども代表	8：24	**Commitment to Peace** Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8：29	**Addresses** Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8：46	**Hiroshima Peace Song (chorus)**
閉　　式	8：50	**Closing**

平　和　宣　言

73年前、今日と同じ月曜日の朝。広島には真夏の太陽が照りつけ、いつも通りの一日が始まろうとしていました。皆さん、あなたや大切な家族がそこにいたらと想像しながら聞いてください。８時15分、目もくらむ一瞬の閃光。摂氏100万度を超える火の球からの強烈な放射線と熱線、そして猛烈な爆風。立ち昇ったきのこ雲の下で何の罪もない多くの命が奪われ、街は破壊し尽くされました。「熱いよう！痛いよう！」潰(つぶ)れた家の下から母親に助けを求め叫ぶ子どもの声。「水を、水を下さい！」息絶え絶えの呻(うめ)き声、唸(うな)り声。人が焦げる臭気の中、赤い肉をむき出しにして亡霊のごとくさまよう人々。随所で降った黒い雨。脳裏に焼きついた地獄絵図と放射線障害は、生き延びた被爆者の心身を蝕(むしば)み続け、今なお苦悩の根源となっています。

世界にいまだ１万４千発を超える核兵器がある中、意図的であれ偶発的であれ、核兵器が炸裂(さくれつ)したあの日の広島の姿を再現させ、人々を苦難に陥れる可能性が高まっています。

被爆者の訴えは、核兵器の恐ろしさを熟知し、それを手にしたいという誘惑を断ち切るための警鐘です。年々被爆者の数が減少する中、その声に耳を傾けることが一層重要になっています。20歳だった被爆者は「核兵器が使われたなら、生あるもの全て死滅し、美しい地球は廃墟と化すでしょう。世界の指導者は被爆地に集い、その惨状に触れ、核兵器廃絶に向かう道筋だけでもつけてもらいたい。核廃絶ができるような万物の霊長たる人間であってほしい。」と訴え、命を大切にし、地球の破局を避けるため、為政者に対し「理性」と洞察力を持って核兵器廃絶に向かうよう求めています。

昨年、核兵器禁止条約の成立に貢献したICANがノーベル平和賞を受賞し、被爆者の思いが世界に広まりつつあります。その一方で、今世界では自国第一主義が台頭し、核兵器の近代化が進められるなど、各国間に東西冷戦期の緊張関係が再現しかねない状況にあります。

同じく20歳だった別の被爆者は訴えます。「あのような惨事が二度と世界に起こらないことを願う。過去の事だとして忘却や風化させてしまうことがあっては絶対にならない。人類の英知を傾けることで地球が平和に満ちた場所となることを切に願う。」人類は歴史を忘れ、あるいは直視することを止めたとき、再び重大な過ちを犯してしまいます。だからこそ私たちは「ヒロシマ」を「継続」して語り伝えなければなりません。核兵器の廃絶に向けた取組が、各国の為政者の「理性」に基づく行動によって「継続」するようにしなければなりません。

核抑止や核の傘という考え方は、核兵器の破壊力を誇示し、相手国に恐怖を与えることによって世界の秩序を維持しようとするものであり、長期にわたる世界の安全を保障するには、極めて不安定で危険極まりないものです。為政者は、このことを心に刻んだ上で、NPT（核不拡散条約）に義務づけられた核軍縮を誠実に履行し、さらに、核兵器禁止条約を核兵器のない世界への一里塚とするための取組を進めていただきたい。

私たち市民社会は、朝鮮半島の緊張緩和が今後も対話によって平和裏に進むことを心から希望しています。為政者が勇気を持って行動するために、市民社会は多様性を尊重しながら互いに信頼関係を醸成し、核兵器の廃絶を人類共通の価値観にしていかなければなりません。世界の7,600を超える都市で構成する平和首長会議は、そのための環境づくりに力を注ぎます。

日本政府には、核兵器禁止条約の発効に向けた流れの中で、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現するためにも、国際社会が核兵器のない世界の実現に向けた対話と協調を進めるよう、その役割を果たしていただきたい。また、平均年齢が82歳を超えた被爆者をはじめ、放射線の影響により心身に苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

本日、私たちは思いを新たに、原爆犠牲者の御霊に衷心より哀悼の誠を捧げ、被爆地長崎、そして世界の人々と共に、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを誓います。

平成30年（2018年）８月６日

広島市長　松　井　一　實

平和への誓い

人間は、美しいものをつくることができます。
人々を助け、笑顔にすることができます。
しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。

昭和20年（1945年）８月６日　午前８時15分。
原子爆弾の投下によって、街は焼け、たくさんの命が奪われました。
「助けて。」と、泣き叫びながら倒れている子ども。
「うちの息子はどこ。」と、捜し続けるお父さんやお母さん。
「骨をもいでください。」と頼む人は、皮膚が垂れ下がり、腕の肉が無い姿でした。
広島は、赤と黒だけの世界になったのです。

73年が経ち、私たちに残されたのは、
血がべっとりついた少女のワンピース、焼けた壁に記された伝言。
そして今もなお、遺骨の無いお墓の前で静かに手を合わせる人。
広島に残る遺品に思いを寄せ、今でも苦しみ続ける人々の話に耳を傾け、
今、私たちは、強く平和を願います。

平和とは、自然に笑顔になれること。
平和とは、人も自分も幸せであること。
平和とは、夢や希望をもてる未来があること。

苦しみや憎しみを乗り越え、平和な未来をつくろうと懸命に生きてきた広島の人々。
その平和への思いをつないでいく私たち。
平和をつくることは、難しいことではありません。
私たちは無力ではないのです。
平和への思いを折り鶴に込めて、世界の人々へ届けます。
73年前の事実を、被爆者の思いを、
私たちが学んで心に感じたことを、伝える伝承者になります。

平成30年（2018年）８月６日

こども代表
広島市立牛田小学校６年　新開（しんかい）　美織（みおり）
広島市立五日市東小学校６年　米廣（よねひろ）　優陽（ゆうひ）

Commitment to Peace

August 6, 2018

People can make beautiful things.
People can help and make each other smile.
But people also make terrifying things.

1945, August 6, 8:15 am.
With the dropping of the atomic bomb, the city burned, and many lives were taken.
“Help!” the fallen children wail.
“Where’s my son?” ask searching mothers and fathers.
“Please take my bones, too,” begs a woman with dangling skin but no flesh on her arm.
Hiroshima had become a world of red and black.

After 73 years, left to us are
a girl’s blood-soaked dress and a burnt wall of scrawled messages.
And people even now praying quietly at empty graves.
Thinking of things the dead left in Hiroshima, we listen to some still in pain.
We want peace now, so badly.

Peace is being able to smile naturally.
Peace is everyone and yourself being happy.
Peace is a future with hopes and dreams.

Rising above suffering and hate, Hiroshima’s people worked hard to build a peaceful future.
We are the ones taking up that desire for peace.
Building peace is no difficult task.
We are not without power;
We fold our desire into paper cranes and give them to the world.
Learning what happened 73 years ago and how the *hibakusha* feel,
what we learn and feel in our hearts we’ll pass on.

Children’s Representatives:
Miori Shinkai (6th grade, Hiroshima City Ushita Elementary School)
Yuhi Yonehiro (6th grade, Hiroshima City Itsukaichi-higashi Elementary School)

平成３０年８月９日
August 9, 2018

被爆 73 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 73rd Nagasaki Peace Ceremony

式　次　第		Program
被爆者合唱	１０：４０	Chorus by A-bomb Survivors
開　　式	１０：４５	Commencement
原爆死没者名奉安	１０：４６	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式　　辞	１０：４８	Opening address
献　　水	１０：５２	Water offering
献　　花	１０：５４	Flower offering
黙　と　う	１１：０２	Silent prayer
長崎平和宣言	１１：０３	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	１１：１２	Pledge for Peace
児 童 合 唱	１１：１９	Children's chorus
来 賓 挨 拶	１１：２４	Addresses
合唱　千羽鶴	１１：４０	Chorus “A Thousand Paper Cranes”
閉　　式	１１：４５	Closing words

目　　次

被爆者合唱…… 1ページ
司 会 者 名…… 2
献水の採水場所…… 2
原爆死没者名簿登載者数…… 2
式　　辞…… 3～4
長崎平和宣言…… 5～8
平和への誓い…… 9～10ページ
児 童 合 唱…… 11
千 羽 鶴（歌）…… 12
長崎市民平和憲章…… 13～14
長崎平和宣言<ことばの解説>… 15～18
平和祈念式典会場周辺図…… 19

長　崎　市
City of Nagasaki

長 崎 平 和 宣 言

73年前の今日、８月９日午前11時２分。真夏の空にさく裂した一発の原子爆弾により、長崎の街は無残な姿に変わり果てました。人も動物も草も木も、生きとし生けるものすべてが焼き尽くされ、廃墟と化した街にはおびただしい数の死体が散乱し、川には水を求めて力尽きたたくさんの死体が浮き沈みしながら河口にまで達しました。15万人が死傷し、なんとか生き延びた人々も心と体に深い傷を負い、今も放射線の後障害に苦しみ続けています。

原爆は、人間が人間らしく生きる尊厳を容赦なく奪い去る残酷な兵器なのです。

1946年、創設されたばかりの国際連合は、核兵器など大量破壊兵器の廃絶を国連総会決議第１号としました。同じ年に公布された日本国憲法は、平和主義を揺るぎない柱の一つに据えました。広島・長崎が体験した原爆の惨禍とそれをもたらした戦争を、二度と繰り返さないという強い決意を示し、その実現を未来に託したのです。

昨年、この決意を実現しようと訴え続けた国々と被爆者をはじめとする多くの人々の努力が実り、国連で核兵器禁止条約が採択されました。そして、条約の採択に大きな貢献をした核兵器廃絶国際キャンペーン（ＩＣＡＮ）がノーベル平和賞を受賞しました。この二つの出来事は、地球上の多くの人々が、核兵器のない世界の実現を求め続けている証です。

しかし、第二次世界大戦終結から73年がたった今も、世界には14,450発の核弾頭が存在しています。しかも、核兵器は必要だと平然と主張し、核兵器を使って軍事力を強化しようとする動きが再び強まっていることに、被爆地は強い懸念を持っています。

核兵器を持つ国々と核の傘に依存している国々のリーダーに訴えます。国連総会決議第１号で核兵器の廃絶を目標とした決意を忘れないでください。そして50年前に核不拡散条約（ＮＰＴ）で交わした「核軍縮に誠実に取り組む」という世界との約束を果たしてください。人類がもう一度被爆者を生む過ちを犯してしまう前に、核兵器に頼らない安全保障政策に転換することを強く求めます。

そして世界の皆さん、核兵器禁止条約が一日も早く発効するよう、自分の国の政府と国会に条約の署名と批准を求めてください。

日本政府は、核兵器禁止条約に署名しない立場をとっています。それに対して今、300を超える地方議会が条約の署名と批准を求める声を上げています。日本政府には、唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に賛同し、世界を非核化に導く道義的責任を果たすことを求めます。

今、朝鮮半島では非核化と平和に向けた新しい動きが生まれつつあります。南北首脳による「板門店宣言」や初めての米朝首脳会談を起点として、粘り強い外交によって、後戻りすることのない非核化が実現することを、被爆地は大きな期待を持って見守っています。日本政府には、この絶好の機会を生かし、日本と朝鮮半島全体を非核化する「北東アジア非核兵器地帯」の実現に向けた努力を求めます。

長崎の核兵器廃絶運動を長年牽引してきた二人の被爆者が、昨年、相次いで亡くなりました。その一人の土山秀夫さんは、核兵器に頼ろうとする国々のリーダーに対し、こう述べています。「あなた方が核兵器を所有し、またこれから保有しようとすることは、何の自慢にもならない。それどころか恥ずべき人道に対する犯罪の加担者となりかねないことを知るべきである」。もう一人の被爆者、谷口稜曄さんはこう述べました。「核兵器と人類は共存できないのです。こんな苦しみは、もう私たちだけでたくさんです。人間が人間として生きていくためには、地球上に一発たりとも核兵器を残してはなりません」。

二人は、戦争や被爆の体験がない人たちが道を間違えてしまうことを強く心配していました。二人がいなくなった今、改めて「戦争をしない」という日本国憲法に込められた思いを次世代に引き継がなければならないと思います。

平和な世界の実現に向けて、私たち一人ひとりに出来ることはたくさんあります。

被爆地を訪れ、核兵器の怖さと歴史を知ることはその一つです。自分のまちの戦争体験を聴くことも大切なことです。体験は共有できなくても、平和への思いは共有できます。

長崎で生まれた核兵器廃絶一万人署名活動は、高校生たちの発案で始まりました。若い世代の発想と行動力は新しい活動を生み出す力を持っています。

折り鶴を折って被爆地に送り続けている人もいます。文化や風習の異なる国の人たちと交流することで、相互理解を深めることも平和につながります。自分の好きな音楽やスポーツを通して平和への思いを表現することもできます。市民社会こそ平和を生む基盤です。「戦争の文化」ではなく「平和の文化」を、市民社会の力で世界中に広げていきましょう。

東日本大震災の原発事故から７年が経過した今も、放射線の影響は福島の皆さんを苦しめ続けています。長崎は、復興に向け努力されている福島の皆さんを引き続き応援していきます。

被爆者の平均年齢は82歳を超えました。日本政府には、今なお原爆の後障害に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、今も被爆者と認定されていない「被爆体験者」の一日も早い救済を求めます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器のない世界と恒久平和の実現のため、世界の皆さんとともに力を尽くし続けることをここに宣言します。

2018年（平成30年）８月９日

長崎市長　**田　上　富　久**

平 和 へ の 誓 い

1945年８月９日、13歳だった私は、爆心地から3.2キロ離れた自宅の２階で被爆しました。爆風で飛んできた大きなガラス戸の下敷きになりましたが、奇跡的に無傷で助かりました。

３日後の今ごろ、私は、家屋が跡形もなく消滅し、黒焦げの死体が散乱するこの丘の上を歩き回っていました。探し当てた父方の伯母の家屋跡には、黒焦げになった伯母たち家族の遺体が転がっていました。この時、丘の下の上野町では、３日間生きながらえた母方の伯母の遺体をトタン板に載せて焼いていました。焼き終えた人の形をとどめた遺骨を見たとき、優しかった伯母の姿が目に浮かび、その場に泣き崩れました。原爆により身内５人の命が一挙に奪われました。この日一日、私が目撃した浦上地帯の地獄の惨状を私の脳裏から消し去ることはできません。

原爆は全く無差別に、短時日に、大量の人々の命を奪い、傷つけました。そして、生き延びた被爆者を死ぬまで苦しめ続けます。人間が人間に加える行為として絶対に許されない行為です。

全国に移り住んだ被爆者たちは、被爆後10年余り、誰からも顧みられることなく、原爆による病や死の恐怖、偏見と差別などに一人で耐え苦しみました。

ビキニ環礁での、1954年３月１日のアメリカの水爆実験による「死の灰」の被害に端を発し、全国に広がった原水爆禁止運動に励まされて、1956年８月、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が結成されました。

日本被団協に結集した被爆者は、「同じ苦しみを世界の誰にも味わわせてはならない」と原爆被害の残虐な真相を、国の内外に伝え、広げ、核兵器の速やかな廃絶を世界に訴え続けてきました。

2010年代に入り、国際政治の場において、核兵器の非人道的な被害に焦点が当てられるようになるなか、長年にわたる被爆者と原水爆禁止を願う市民社会のさまざまな活動、さらにＩＣＡＮの集中的なロビー活動などが実を結び、2017年７月、「核兵器禁止条約」が国連で採択されました。被爆者が目の黒いうちに見届けたいと願った核兵器廃絶への道筋が見えてきました。これほど嬉しいことはありません。

ところが、被爆者の苦しみと核兵器の非人道性を最もよく知っているはずの日本政府は、同盟国アメリカの意に従って「核兵器禁止条約」に署名も批准もしないと、昨年の原爆の日に総理自ら公言されました。極めて残念でなりません。

核兵器国とその同盟国は、信頼関係が醸成されない国が存在する限り、核抑止力が必要であると弁明します。核抑止力は核兵器を使用することが前提です。国家間の信頼関係は徹底した話し合いで築くべきです。

紛争解決のための戦力は持たないと定めた日本国憲法第９条の精神は、核時代の世界に呼びかける誇るべき規範です。

私は、多くの先人たちの働きを偲びつつ、速やかに「核兵器禁止条約」を発効させ、核兵器もない戦争もない世界の実現に力を尽くすことを心に刻み、私の平和への誓いといたします。

2018年（平成30年）８月９日

被爆者代表　**田　中　熙　巳**

2018 品川区平和使節　派遣レポート

発　行　平成 31 年 3 月
発行者　品川区総務部総務課
〒 140-8715　東京都品川区広町 2-1-36
電話　03（5742）6625

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用
本誌は古紙を配合した紙を使用しています。

「平和の誓い」像

誓いの灯（ともしび）

カンナの花

「誓いの灯（ともしび）」の説明文

非核平和都市品川宣言文

JR 大井町駅前

JR 西大井駅前

五反田文化センター